源氏目案

中よりうつして

へ12
20
50

特別
門
號 20
卷 750

源氏目案巻第三

よ

一 まろが
なれまろにも 此門のれ復(コト)は何(ナニ)事も未代(ミヅダイ)まで 記(シル)しとゞめおへや

一 ものずきの 河竜(ヨウリュウ)物語 一よせともく 編者(エンジャ) 餘情(ヨセイ)二流(ニナガ)せや

一 ものゝふ不粋(フスイ)不営(フエイ)あしくせばとそ心やせ

一 ものゝさまよりにぶにさまよりてもあるさまよりてもあるさまよりて何家(イヘ)に夫(ソ)ふ此(コ)ものゝさまよりにぶにさまよりてもあるさまよりてもあるさまよりて何家(イヘ)に夫(ソ)ふ

一 ものもごゝろ 意(おもざし)のそけざま生(おひ)ざまにて人のこゝろこゝろざしにて死(シ)ぬる

一 ものゝさま海(うみ)ものやうにて 模範(ウツシ)ものゝ 衣(ミノ)ものや 清染(ソメ)ものを云やし

一 まあり四方(ヨモ)書戸(ドニ)を南へ大書院(オホシヨヰン)一間(ひとま)ものゝ

一世人　よ人〳〵の文字を加へてよむべし　後宇多院の御諱
世仁　とかせいは此ある也　　一よろへるとし　いふべき　夜つゞきは
更衣にゐるかれ心也　又夜つゞきは涼し似たるとや
一よそひ　よそほひ也　　一よすが　便也　縁への事に
もいふ　　一よそつれの山のこしにまなひ
是はさるべき女の心をとゞめてのよるべきやうれ後さへをいふや
一よそぬ　不過也　　一よるかた　よるへかたとよむ也
妹といふ心　　一世をそむきぬやうに人をも
あしき人のやうにとや　　一世のまゝひまて　継母　継子の
あひたるれはとや　　一よるかひ　ゆくべきさ心也
一よみぐくち　蘊生　又活　　一よりてこそ　女のされはさそ見

一夜とかはらへてよりてこそ心也　ちゝがさらさゝされるや
一まとひのほどもまけらく　源氏十六歳の息所廿三歳
一よづゑ　折れぬ心也　　一よべきの夜の事也　よんべ
とかもれてよむや　　一わざと　過色おりまする心
一われつれなきれ物　出家なれは無常をさとれぬや
一よけいる世なれる心也　　一世のうちは　さめぬ夢とれぬる時
の夢にはおもはずなるさ世はいふべし
一よき波の玉まれゆるもやうに深の心は也てよみ
一よそへいり　あてつしつ我か家によそへつや
一世のまゝめ　世に世に別也　　一世の中　きりつぼの御門　桐壺帝の御位
と　出産へゆづりあそはすや　　一世のかゞみ　世のおぼえひや　恐

の字を万葉に用
恵心僧都横川僧都
源氏左遷の処
処字治の巻にも
る衣ぬれじとうらも也
手清つ佐るべし 尼こは前の
別当の下名 さてやよもあ
尚有徑すゑ殊勝車 前後各十二輛 楚王臣 陪侯蛇病愈さ
ふに七すの玉と合て夜ま
七浄て 楚王に献じて夜中よ
一世代まで 珍宝さ 明石尼 道 瑞夢 さてふ男の人ら

一よ何の僧都 中宮のれいならぬ
一ようやくぐもりぞくる
源氏左遷の処 処字治の巻にも
一ううら波よ 山海 用さ
一うらさうもなくすけて
手清つ佐るべし 尼こは前の
別当の下名 さてやよもあ
尚有徑すゑ殊勝車 前後各十二輛 楚王臣 陪侯蛇病愈さ
ふに七すの玉と合て夜ま
七浄て 楚王に献じて夜中よ
一世代まで 珍宝さ 明石尼 道 瑞夢 さてふ男の人ら

一乾くめもみく 枕ぞよ
一うらみおとろ 手 良房の
る 源氏よ 何海 良房云乃時の
事 当見うるしてそくべ
一ひまもなくて うら尼の
ひのうれ松こいふ 七者 神
檀蕨芳ろくひ 山の 宮 八町の 家
瑞 車渠 馬瑙の 香 沈 金銀
庫のごとい春山南乃
ゑうへうとろ 皮 文 模
一世のひの後のをれと 後の文 文をとく云あて

一ふるけく 弄のどゝまる心やも 玉づゝ修三
信一法さ
一ゝちよゝちのべそれバ泊哭
執政人罕ノ笑的古畑河のほ
まてる葉平猶会の奇を詠
一ゝれつれの 朱雀院の幻葉哭
せゝあーよりやゝそれてもあ
一世をつれ 世代ゝれそ
死ゝ小野老をゝちつれゝうやも
一ゝうかゝすこう 受を信ずう
ゝ孫さゝ人云夜昏不順統心や
一ゝうのれ陛のゝびゝをよせ
一世代ゝれ 八重ゝる雲ゝゝ
冷泉いれ心いゝゝへごゝ
一ゝうれ山の焼と 君と云やも
一世ゝゝうれ大ゑと芸ゝ中の琴毎ゝうち
一ゝれのゝ和 賭俗ゝけや
一ゝゝへてそ 私ゞれと大ゑ
ゝんこれ也

一ゝうゝひるども 玉づゝ修三
一ゝちよゝちのべそれバ泊哭
一ゝれつれの 朱雀院の幻葉哭
一世をつれ 世代ゝれそ
死ゝ小野老をゝちつれゝうやも
一ゝうかゝすこう 受を信ずう
ゝ孫さゝ人云夜昏不順統心や
一ゝうのれ陛のゝびゝをよせ
一ゝうれ山の焼と 君と云やも
一世ゝゝうれ大ゑと芸ゝ中の琴毎ゝうち
一ゝれのゝ和 賭俗ゝけや
一ゝゝへてそ 私ゞれと大ゑ
ゝんこれ也

一ゝうゝひるども 玉づゝ修三
一ゝちよゝちのべそれバ泊哭
一ゝれつれの 朱雀院の幻葉哭
一世をつれ 世代ゝれそ
死ゝ小野老をゝちつれゝうやも
一ゝうかゝすこう 受を信ずう
ゝ孫さゝ人云夜昏不順統心や
一ゝうのれ陛のゝびゝをよせ
一ゝうれ山の焼と 君と云やも
一世ゝゝうれ大ゑと芸ゝ中の琴毎ゝうち
一ゝれのゝ和 賭俗ゝけや
一ゝゝへてそ 私ゞれと大ゑ
ゝんこれ也

求二四虚上下二東極ル二天海一踏蓬壺一見二宮高仙山多模図一而
廂下ヨ洞ニ東蜀岡ニ其門署曰玉妃太真院 長恨哥傳
一うるさゝれまいらせ候 玉のおのこゆゑ 玉の緒とつひえける

た

一玉のおのこゆゑ 玉の緒とつひえける
哀や
一たゆげ うるさゝ哉
一たくへぐるれ 雑堪
一まろれゆく まかろ〳〵い方士や 幻術士が名や 玉のあるくさ。
更衣の竈のまへやとめる
一大派の芙蓉未央柳 見長恨哥ニ
大派い池の名や 芙蓉い蓮の名や 未央い宮の名や 蓮花柳ヨ揚き妃
一大家みの坊氏 禁中ヨ大家ヲ名
そそる机を二そそぐ供れや お氏ハれ腊をゆや 是ハ常ニまゐる供れや お氏ハれ腊をゆや
一たいくるさ
一たく人 さゞふらふもしや 退く〳〵 不遠
人どの名や 親主のお限ら
一たつざ 便
一大るまつて 山路人の家ぢ
一立田姫ごいそんとも 女の物ぢ
一七夕のよもすがらめる
一たのめぢ 約や 約ハ海や
一たのめる 乳や
一たらくへるくくへるや
一たぢんへお別すくへるや

一たうがい 鳧絨や

一たてそれ誰でこうぐようぼ

一たゆます うもまれやうもむい由ゆや

一渋口おつうものまれ 禁中にて渋口の宮廷中女人武家

ようでうや院そい底者百ざい光源の者を渋口さん

一大らこ 大酒や 趨る法しを

一たむけ 餉 糀ろ人ろ砂か

一大代の後そて 明石ノ入道大代の

一代々の宝の内き 播磨国司

とい、国司ハ一任四ケ年ごそて、国司ごもりて、父ゆめに必ず

ろやその受伝ごとに渡ごいびあうんとえだうけひぎろや

一大納言の心すめ 装の伝母や

一たらうもう をうくいうぐ立

ときもう活ろめぞ 客のぞぐ

一たいよ 糸の料や

一いのうをそくうう

一ぜ下の系人後よそその役や

堂 今薬大鼓ハ必堂下ろそ

日 番上競馬六番の時 主上

一大ろん百 禁中にて 女房逆のあう百や

一たんめん治ろ 花鳥云

先帝 儒者奉 作獻題次書韵字盛中 境置庭中文

臺上近衛次将 先深御料韵二字置菖蒲 昇自御前

階獻之次王卿「堪」屬文者文人亦各進文墓頭探二字
見之麥宮性名及「所」探字也今案探韻ハ各一字ノ詩也
悉韻字ヲ以テ故懷紙端作云春日同賦春夜翫梅花
各分二字應製詩探得其字ヲ
一大將ノ云　大將ハ兼ず幾也源氏ハ此ハ
參議大將也宰相ハ大將ノ藤原房前冬嗣ノ常行一条摂政
一大將ノ云もうさまつる　參儀二人ノ内一人ヲ
一大將ノ云もうさまつれ息有ル源ノ
か妻ともを也とらもうさまつる　又ノ女ノうちもいそれそら也
一たけくれい強ふれいかや一たくうさまつる　探彩及菓
流隨時蔡敬與　提婆達
一たぐ

一たぐこれうさまつる　再天廻雲將唯退而行月
一たぐ遷菩
堂石階花柱竹編墻白氏文集
後漢書梁冀能深慕ヲ和國ヲていふ物也河妻
一たけくろさ　ふぐろ心也露ふくる
一たまもぐ海邊ヲたよる玉裳ハ後撰ふまる奇女の裳
一たぐのぐち　彈碁
一たうぶいのれい　太夫ノ女　髯黒のいふ也第香炙
一左上天皇ヲ再ひ尼ヲ成
給ふハ皇太后ヲ給ふ也河海本朝ハ上皇ハ
持統ふ始ふ女帝也藤雲ノ女院ノふ持統ノ例ふ

花鳥 女院若ハ流伝ようる給ひて院よ成給ふ小一条院ちどてバ父
上天皇のそ男とハ申ず但封戸年官年爵ちどて差
異もちられバちどてハ封戸ハ申ず也れ封とハ封戸ちち三ごと
各子ハ百戸ちを給上天皇ちずへて二千戸給りの也
院司ハ女院ぐるけるさらう別当代主典代ちどや三宮ハ太
皇太后宮皇太后宮皇后宮。
一たこの〳〵鴻ノ池ハ名上ハ殺や一たひ〳〵類聚ハ山ぐる
ひと云ぐる〳〵河原ハ瀬ゐ一王ぐる〳〵やぐて所領〳〵とも。
ちうんハ妄言道祖神も照覧あれ心ぐてめと咒べし
一塔こばちうへも昔女貞女ちり〳〵てあれバ人

のうぐひすもうらて塔の壁をこぼちて焼ありしことども。
丁こばちうともあて河頬牧まぐるとゝ花うへの中納ゐ
地位よる丁こばつや手毬竟ちぬるる女の子ゆべし
一行ちう地位や梅垂方や
一漸ゑ大安寺ノ寺ノをちうめと
や貞観十八年二月廿五日ハ泥洹院為大学寺一棲霞寺にも
御願あり
一大ぐくのぐち西三条大臣良相ハ閑院右大臣冬ゝ嗣ゐ
を云一説ハ玉手祖ぐて玉ぐるそうる也女ハうけ子ども
のよや大臣の息大なのろを習ひ本の例也
一大将内大臣ちちのひて内大臣被改例給河南白 忠義ゐ第通天下
禄三十月廿七日内覧同十一月廿七日警ぐ例あるとゝ也。

一辰の日の宴つかうまつり十一月丑日より始若丑二る日ハ下の丑や仮上の丑ともに有例丑日ハ舞妓参入寅日ハ節の心と卯日ハ童女出覧辰日ハ又節の節会の日や辰の日の宴つかうまつる不審や豊明節会ハ同中乃辰ハ若ハ節のわかれまつりて皆つかうまつるものなりけるや

一大学の寮その日 進士注曰有進受爵禄者や聖武天皇神亀年始進士試帝王系図進士及第例略之下同 弄一勅秀才ともかいづれも進士ども云けるや

一大まの宮ん河大宰府一員へ帥権大弐小弐大監人小監人大典大小令史等わう小弐叙爵ス時小納言ども云監叙爵の時大史監と号す大監ハ正六位下小監ハ従六位大監ハ正六位下相当ハ従五位下より叙しかれし大史の監と称するや

一大ひる大悲者観音のこと

一たゆき堕羅支記をちがへる長根ともすべきなり根の音をもてゝ引出のべられたるにやあらんとぞ

一たゝらくそん六日武徳殿騎射そく打毬の事ぞ

唐人の狼藉して馬より落て毬子打ぐしなどいふ云ふ其時袋すゝ馬代打毬ともいふ云ふ納蘇利も六日の競馬の日雅楽寮是を奏す勝負の別声ハ必競馬ニまさるもの也

一たうとうとくだのそれも何ぞや倒れ臥せる心地
一たてもとゝゝやうどでや　一ところめるに今いきうるう
ゆうつゝ地ゆるやかにくだくだ
一たくめてそれ迷惑（ヒンシ）してやすらひやう
一たんのゝゝくゝゝ悩（ダンノウ）ゝゝる御心地（ミココチ）ありて陽心（キヨウシン）あるべしとも
一たゝやめの婦女（タヲヤメ）雲おもうへすゝふ漢高祖（カンノカウソ）の父太公（チヽタイコウ）で有て天皇ゝゝ
給ふをおもへるれ日本ゝ何ゝゝるゝず
一たいゝゝ平（名工）字なや　中ゝの大饗（だいきやう）して年ゝ（その）
一たいさやうるずゝへて中ゝ
ぐゝゝびの（ぐ）のゝ契るさせ給ふのゝやう花鳥　正月二日二条

大饗（だいきやう）年（ねん）両文記云大納言（だいなごん）白大将（はくたいしやう）ゝ（なり）ゝ記中納言同ゝ記（しるす）
代大将一記（しるす）非参議（ひさんぎ）四位侍（しじ）色小袖（いろこそで）長一連（ながいちれん）ゝ略（りやく）ゝ
一たゝゝゝれ給（たまは）ゝ（り）て一たゝゝゝて（第下）御（おん）又烏帽子（えぼし）
一たけゝゝひゝゝせいゝゝ
一ゝれ（号）又心得（こゝろえ）られ私の御代とへゝゝるを保元（ほうげん）ゝゝ
給ゝゝ心得（こゝろえ）ゝて（ゝ）ゝも伊勢（いせ）ゝ（の）斎宮（さいぐう）ゝ（の）ゝ（ゝ）ゝ
一たゝむゝのあゝんひまろゝゝ（ぶん）
あゝゝゝゝゝれ今のゝゝ
一ゝゝゝ大閤（こう）や　一ゝ（号指）ゝゝて心（こゝろ）ゝゝゝゝ
御ゝゝ御（おん）ゝ（ゝ）ゝ（ゝ）ゝ（ゝ）ゝ（ゝ）ゝ
それ（ゝ）ゝゝゝゝ　一たゝゝ（ゝ）ゝ

一たそがれさんざん　堪忍も稀に　随時恭敬を頼
さまざまに　荷て　老人の役とて
一たそやこころ　探梅設食　五時奉事経れて子歳
子歳なりの　著ひ　なるべくなら　なりそめて
一たくめども　くめども　乳の乳を　
けさも　よい　佛へ　献られず　常在霊鷲山の心
見抜仏世尊　恒河の深妙典　説らるるとは
一むしゐの　涙の魂　このくるまよもらんとや
一竹川の　竹ごの曲　そうそうしゐ　竹のうれ
もみ　何まに　ゆりそめぐくて　ありゆくてこそ
一竹ごのう　伯牙ひいて　こそ　こそ　こそ

よう　よくまろと　ねようと　早　下げ
一たちうえん　惹　尚家あるべ　寝ても
一たくて　糸紙ろ　基　非狼谷　水清　流　泊とろ
一猿のやどろ　晨鶏　寺　残月　渡　征馬　連嘶　行人　白氏文集
一たくのくい　昔の法　ここて　禁中　そでや　答拝
真　も南階　ここて　礼あ　心　揮　譲　作法や　彩天納
の祥賀　惹　来学　白　遺　衣下　ぐれ　ぐ
一大史　ぐ　やれ　大史　がもとへ　ここ　許
一大内記　ある　補　ここ
すこも　参　ここ　何や
一たけよのう　ここ
一たいこやくくも　くくのう　梵天
帝釈　人　ここ　ここ　天や　帝　天　忉利天の　直

一機の 機のまほろ心してぐきさぐくちちむしを取ぶ
洞ういひをのみや 一脱ねして 張ねしてころを
のへれ心のうちうちあいそして 後よ改定あれごちち
一たけちちちく 笛のたやうぐ紙和琴ようしてうこと
一玉うそ 珀玉 毛珀 一たちそそ 親ちどよ中なを
影添そうろ拍をとと心治や 一たまされ 獺魚見葬礼記式
獺・入指もろうへを至而や 獺魚そて穎生しう事そや
字治のみこ・雅波のみこまあくひをもて 拍をのれしるれ叫
べさん 一たたの折そうち 谷ある家
のおぐそをや
れ

一れうそて 源氏のれしれいを例や
一れいのそうきぐそてんちそ心やれいを例や
一れいうぐる月日かしのれ 令曰陰陽寮頭一人
掌二天文暦数風雲気色一謂天文者日月五星廿八宿也
暦数者計二日月一度数而造二暦捜一時也気色者風
雲気色也観二其書色一候二十二風気一知
其妖祥一 應和二年七月廿日・黒雲気廣三丈許起二坤
艮一 應和二年正月五日白雲廣三丈許絃天亘二東一
一れうしうそをさるんそて
西二
寮試 花鳥 試ち月史記をちむしやうそうそ人を
擬文章生補ち次の初よ大学寮うそ心そうち及第の人を

文章将業生ヲ補ス是ヲ進士ヲ云ヒ或ハ前ニ挙テ勅ヲ以テ
補シテノチニ方略ノ宣旨ヲ蒙テ課
試ヲ経ルヲモ文章生ヨリ補ス
一れいのそんでん　ろくろ初あ
夜のうち
一れいのうつくしまの額をいる
一れいをそ申　毎月八日中堂
一わらべ　練や　わんごろの心
そや
う
一ろうのうへ　そくろはうや
一ろうねん　精
一ろうろうの人　ねぶろ心や　ろうかんをみそこなひをいふ
一ろうびず　狂伝寄　横陳
元服の祝ひ女房ども
一ろうそく　燭や
一ろうそこ　足下　花人をいふ
一ろうを　物や
一中の帖にて三のおとをいふ
一ろうれん　添肴や
一ろうけつさ　側付や　ろうそくの抽ずきをして縦ろうを横ろ
一ろうそくのしんをいふ　是ろう馬
一ろうそくのしんをいふ　是ろう馬
一ろうそくのしんをいふ　是ろう馬
一ろうこはりそこともろうそくのしん初や
一ろうをあけてそくろうをいふ心や　ろうはそくろう初や
一ろうそくをあけてそくろうをいふ心や

一うぐひすのうれふる巻　尾ふるふる
さゝや　世なそむくの心
一うの人うは　それさゝきつ
一そうづうの声　鳰（カヽ）の八月十五夜
一うよそれよるぐ云初（ハジメ）
一うづうん（傍加）琴（キン）や　源氏（ゲンジ）
一うぐや（まつむ）　さうごいつ初（ハジメ）や　源のれ出（イヅ）さや
一袖ふさ　さむき軟（アタヽ）ぐ紙ぬさをあふさや
一うぐうのう（ふたりのゝ）　さうさおのふう　さうさぐうさるぐ　すうるや
一袖ぬふ（号）　さふ名　袖をぬふ寸家のゆうとふる　我うごう
一うぐふろふ　さうぞでうん

一源の心のそふる立（タツ）ぐれ心や
者の遊着（タツヤ）のふや
一髷（にわ）ぐや　帯ハづぐふふう
一うのうのいねを修（ウヽ）ふべき（ごゝ）儒（ジュ）
一袖ふへふ百代（ニヒ）　舞の袖（ソテ）を
一そふる心や　胡（テウ）ふふつくぬ
ふふや　釵（ソヽ）ふぶむ心や　一袖ぐうちなぐふうれ初（ソヽ）
手端（トウカ）寺のはの出ーぐぬふ
ふふーふぐーさふ也　袖ぐうちいすぐれのふふる　女房の
ふふぬの袖を出てぐや　今の世にも大饗（キヤウ）ぐれ時（ハレ）乃装（ギ）ー
ふぬの　ふ半（ニヽ）ぐのふれし　いづーぐぬあふ
一うてぬふ（号）ひ　花　巡（メグ）ぐらい沼（ドロ）ぐのうちうふ袖さて
袖ぬふーふもいふうふ由よもふ巡ぐふふふ

泥中に埋りたる抔は、息両の紙力せらぬと人沈也。

一 袖の上の玉のくだけたるとそん　未勘

一 それをこそうらみぬと　しかけりしもちとなれかしと

そもしさくるこびるや　大都を帅

と云也

一 うちれせうそこ

一 うらハすら須すりうらやうるて

うらやこそや　帰リ来倚杖自歎息　鉄頭風定雲墨色　杜詩

桂嶺瘴来雲似墨　洞庭春尽水如天　柳子厚詩

一 うひえてはそやうるすゞろに元俗にそびくと云ると云許

一 うこそいそれしそいや

一 うびやき　涼の明名をそいはせ

いもはそやさけりうぶいまはまれくしきや

一 うれ人なしぬ　寛平遺誡云　今須云つて中令貢二人逹

非其子必令承貢ニ此為ありえいあれども必節にまいらし

ともする上下略く

一 うこの詞がい　諸衛六衛の人

けい下といふべし　懐安河北二寺今日主殿司正一人掌ニ調習

太るす詞ハ仁徳天皇こそ此中に高麗より渡りかゝれ　称ハ倶知と

云しとや

一 うう王れハいうし先れ

義和なるは明天皇待従なり　夜方ハ秘蔵の書不傳男まと云制なる

一 侍従二方　黒方

一 うれうくれ　前の何は菊いうと

いうしてとあらけ藥両大家のすゞ雲井房のおもてうすしき人に成法

一 うむしや　尚書・太醫の時等

うう心とうなる

者と云るすきさず別てと心得て一箱・唐物法爵薔の三の内一

一 うくれゐるのこと　外典を云也

あるとさい学者といへり

一うれむさめる　樂書曰、帥文之變易寒暑陰陽之感動風雷之謂琴意也琴書云師曠晉之樂官也工於琴能易寒暑石風雨爲晉平公敲之感玄鶴下舞

一そこのやうなるもの　そこのやうなるもの

一うばづら　雨の漏るもの

一三位中將奥州探察使兼行右近衛大將源朝臣保定

第平六年七月十四日薨四十七男八條大將時平公一男也

朔風坐の元始保忠物語る時代ちがひそうせさせて

始てきちきちとうれすがをこう世中ときりつきそれ人

七均しむとう

一うつくしあむこと

一栴花物云院のみれの葬送の跡れ車ちう院おゆきで

一そのうへ人ども　一うれれ八文の文始て書出る幼かの時ちをおうそうち

一ざくひそう　赤坂山谷ざ　一うて待るも作れう

ひして破れこうそのへう根ごろ

根ざうざうのうねも　一有るれば其のうちうをすいしのやう

一うそれ　畫士をれうざうそのうやう

一うくらう　賄賂財物ぞ　一うれやうくうそ　言れるや

官位よのぼる心や　一うれうれいのうへ　班女園中秋扇之　建立臺上秋琴之音

班女ハ後にすてらるゝ古文を詠ハ不知して下句を詠ず。
にや詠ハ心をそれるゝ也。自扇をあつ首をえてけしけるや

一うくいす鳥の　可怜病雀半夜鶯　落蛸狂鶏三更唱暁

権徳宮

一袖ぬれし　昔の人ハうしぬる。

一うはひハあつやもするこ。自れとはせあへう

一うえひ　座もえしぬ也

一うつろ　坐すゞろそゞろし。

いづれも同心也

一うう　孫也　王ふう。大史盗そ

うひろくハ旋也

一うまれて　なして。文殺もそ也。

二旅不也。慈殺　笑殺ゝ詩とも作り大慨殺の字あるべし

一うしうても　教へつてやうあるうす　天運のうす

一う心ある　それハそうちあるうも也。

一うひくしきそ此　人の姿のちいさやくあるを云

つ

一つれあき　雅曲

一つゆけき　露けきも

一つ　鼓にぎはへる心あり

一つさ　集　日本記

一つらゝけう　うらゝけうと同心也　つらき月

一つかさんざい　清涼殿の東の北庭。月西の北庭に。萩花也を植也。

一つれぐ　徒然也

一つきへ　あつまる心也。流ともとも

一つなぬ舟　泛若不繋舟　文選

一つぎく　次第くの心也

一つゝつえ　杖頭　つえつえ也

一つさくしぬ　官位也

一つゝくいるれど　恥ある心也

一つるびきて　女ハ馬にのるぞ　さつさそとしおるびうまし。

れをそこそこんとそのひてゞうちりの涙や
一つゞもろふつゞもろふうこいてい笛とみさくするや
一つれもろ伏　そもあへめまでゞ鳥をそへてのくるゝつれもろ
そうこゝもそてめとゞゞこひの袋実もろ由ゟ中将ゟそ
んそてゞくゝめろや
一つゝいそう　五風情
一つゝそゝろひ　突や　一つゝあて　早朝のるや
一つゝらゝもり　九折　松まよゝをそもろ絶ゞそゝれつゝらもり
一つゝゞゝゝう　方役　移仙　衣替　蒔絵　見延喜弐
一つゝそゝろもむそ　最後
心とゝよゝめもり　一つゝもゝもめ　心のやこいよとそゝ
一つゝそゝゞゝ　市女笠ゟそ
そゝめそゝそ中ゆひろゝゟ

一つゝそう　秋陳司や　喜除肉者　号縣召
各拝仰そゝ雪ろゝ春若太政官庁教隆　弄八月
之仍稱官名
さいひりめや
一月のもむ　雲ねそゝてゝ葉
中れるよいあゞゞ中家れ野家しめて　九利天上ゞれ品や
世れやゞゞ貝家のるや　一つゝゆさいるあ　時そゝ南
ものへやゝろゝ哥ゝゞいゝ紀ゝるゝべし後そ書
さむゝろゝゝゝ奏之
一つゝみゝさ男のゝ　妻ゝ　一つゝりゑ　紅色そゝや
一月のそのゝそもれ治　月顔仗鏡　朗罪　風気労

伐懇荒疏
一月日代ひらをのよ　若葉
寒ゝ明石入名夏よろ
一つもろくろ
一つろくろさ等ぢ〳〵れ〳〵中略何也俗ゝつゝ〳〵との心
一つやろたいも紀　貪豪時
一つのえれさ　ところへろ狩
一つろえれの山を吹ろ風も
甲斐るゝバ根ろ〳〵山ろ〳〵学陸な
一つのろをを　常則蓋
一つるゝのろず　不審の

掃地と東坡詩ろもろ
ろち　煩費
れいろろろつろ
工道風い紬書也
ろよ孔ろゝを付也ろ

一つろろもろ夜のれあろ
て節会ろのお仕ろべさろをあろざろ放也
一つろのあろのろ多　放鴻の笑い待ろ〳〵ろ扇量すること
ろもろろめ也そていろすべちげ也といろ何　放鴻試ろ也
一つろ夜　寝ろど也
一つまろ急のやろて范あろ
てゞぞれも紙ろを
言ろへていろんろ也
一つやて　ろもくろろ心也
一月日ろろろ　ぬの宮への文お
一つぐいもろお　様の等ろへろ
一つろろろて花　和琴也大鼓
一つろろ
ぐ〳〵余日をろべ〳〵ろ也
餅也ろ

るぞはうめをでこぞもれてとつくも
一つくもやくそうぶるや
一つつそうもみわそうや
うぶさそうぐうそう
一つくあるつ　秋仕大化・多多志を
一露もびき岸のけ息あの心い虫の声よ笹のそそくそう
一つねうす　不夢和多つそうが
一つまりつき　弾ハ指そう
一つくあるつ　秋仕大化・多多志を
一露もびき岸のけ息あの心い虫の声よ笹のそそくそう
いろ・夕ぐうの笹のそう・指ハギ・花虫のあう
みえのそをけす・八雲けお・文選　長歌・賦云
一つぐそもぐめくが唄吐お児
一月げいおるぐ　禁中も冷泉院
蜂・猿・蠟・同・元音・猿積云
の乳ともまするや
の月をおそれ乳ぜ・添のおの秋ぐうろうそ早下ぐ

一つくもの　名ぬよそれそ志の濱ゆあそ乳・豫忌のはの衣や
一つれくと　虫の声ハ蜂や・うぐ
一つくもののくつれうもも　六条院絆乳のそ乳
一つくあるつ　恙や虫の名や　食心腹とそ
一つそうもも　史記曰・季扎之初使・小過徐君・徐君好季扎
剣口弗敢言・季扎心知之・為使上国・未獻・還至徐・徐君已死
是乃解其寶剣・繋ら徐ノ君家樹而去・従者曰・徐君已死
弔誰与・与・季扎曰・不然・始我心已許之・豈以死倍吾心・呉
世家
一つそくそう　ぬそうすくぬ
ど・大名の哥よそくぬや
一つくも　乳拝や
一つそうま
一月そうむ　後撰・九十六・月て

一ゐなかびと表さいふひやとや人へのをとれがう可刻こゝろ
一つゝれくなろ〳〵始　葉大将もれば、そのつゝれくとも中将お将
ちぐだ大将つ〳〵人をうびて緑の也
一つゝも心を　辛子　海ゐひうちの前男のまゝもれば、つゝも心と
いうち
一つば四月一日ぜうそそ、やがて　一つゝちびの夕月夜　蚊の
おり、阿仏記　も七日の月を七日れ夕月夜と
一月つれ八日　案師（ヤクシ）の縁日也
ね
一女（をんな）二位三位（にゐさんみ）いう、后（きさき）のつぼ也、学（ツボ）れ上前（うへまへ）の出方（でかた）ちぐ云伝（いひつた）へ
一ねぢり　侍（さぶらひ）人（びと）ロ（くち）ぐ（ぐち）

一ねぢうわるもや、始（はじめ）ねうつゝれ始（はじめ）ゐまに、中河（なかがは）そのう
一わびわて　亀（かめ）のうらわていうねごとや、寄（よ）せけうづ八藤（ふぢ）
一ねいうねと　いうらわていうねごとや、寄（よ）せけうづ八藤（ふぢ）
つぼをおぼー出（だ）そ、ふうとのくらまれ根（ね）ー寝（ね）をくうち
一わびへ　辛（つら）れうう人や　一女別当（によべつたう）　法家（ほうけ）れ女別当（によべつたう）也（なり）
表式（ひやうしき）ううう安（やす）家（いへ）前（まへ）菊也　一動（どう）今れ也（なり）に、院（ゐん）家（いへ）隣（となり）自家（じか）
ちぐにお前（まへ）の房（つぼ）ても　一念仏（ねんぶつ）衆（しゆ）生摂（しやうせつ）取（しゆ）不捨（ふしや）　観（くわん）
無量寿経（むりやうじゆきやう）ゐ　一女房（にようばう）のうつゝ　盤（ばん）一重（ひとへ）也
一ねうちぐ名　年（とし）三正五九月六ツ日れ天帝（てんてい）釈（しやく）八月
菊外廻（きくそとまは）あふ（あふ）ぎうつ姫（ひめ）ぎ
一ゐ日　元日ゐ日也　十節記（じつせつき）日

正月朔日、盤古遠望四方得陰陽靜和乱除憂煩之迷
一わらべうた 祢宜言 わざひるや、神ないのうた
一朔日ちごに 祭の南日や、正月のよれ日かけ多き
一わうくく わうくくすもむをいろ、花猫字のをやうや、
わうはよき過すや
何よ条二条后の業平記たる通路しまるどもこう後撰
云ことしのぞこそ後京極のうやまあるはうけ、元良のこと
此歟也
おれりけることなの名はれ勝うる玩るべしねぢけうる
もいろこぐまのようこさ心や、うたの智
うべき心や、手わらけうるはうや事をうひうる

主面やとおもはれうや 一わんけうる 万事ノ家ニ生智
一捨離ニ専心ニ発願向西方ニ一ねのこれ餅 まハ実の盤石
ゐよ依てよのこの餅を惟光が云、三日祝をよのこうあり
なよ
一すよくと何栗やりうや、或はうべう日心れ仰ちべ
一たすぐうう 平也
一繁字也
一内侍のすけ 典侍・尚侍・掌侍・令婦ちれよ彼し
うへと心うべし
一たうさんのすうろのさけん
揚名ニ妃のすをこつ、方士ハ既よ妻めよおのそ、んぐしな
をてくち、云宗よう也うて、更衣よハ
令婦いおいぐればくの名也し 一中うへうてと云心や世給よ

云中ろうていろ　一なすもあうう　寂婢（ナニメノ）生花（ナマケ）
ちまよくくよ二の心あちゃ矯（コビ）ろうせ（ナニメノ）云女房（カミナリメシ）の哥の心や文生の
字（ナマケ）ちまよくくと云ハもんくくるまくくくくちろ心や
一なすくひ　ろそもろ心や　一なすくひるれひりくや
相撲（スマヒ）取（トリ）　一なすくひ　ろれ
一なすくうちおりてくとうしろ　長橋（ナガハシ）ら代清涼殿（セイリョウデン）ろう
然（シカレ）ども家屋（ヤウヲク）へろよ扇（アフギ）やけ百ろよ東の庭（ニハ）よちくく階橋（キザハシ）あちゃ
猶（ナホ）ろおりて白（シラ）紙へ向て辞（ジ）儀（ギ）ちゃ　一なすくひ　ろれ
一なすくひろ　簪（ヨビカ）やくやろ　一なすくひるれ　行（ユキ）やろ清（キヨ）也
今紙人（カミヒトノ）のんろめ　先（マヅ）祓（ハラヒ）ろう　ろうめくへなれども
こちろ（クヒヲ）ちとに　ぬろそうくろ亜（ナヲ）人（ヒト）法（ホウ）ちま

一なすまくく花　今まくくそ代　ちまくくろ代心
一なすくひ　ろんちちもべくくさ
ちどうと云百ちゃ
べく亜（ナヲ）衣（ゴロモ）やさくめろ紙略（ハブ）くてろ
さめろこちそくさくてめちゃ
一なすくうやりくろや　一なすくひるれめくよ大方ようと云心ちゃす
ろちゃ　一なすくひ毎のちろ夜　行やや
一なすくひ　ろそびやりくろや心や
ろと云心やぬろにげどろと云心ども　一なすくひるれ
一なすまくく婿（サニコロ）心　一なすくひ　ろ馬（ムマノヨミ）なぐる（ナグ）ち行
くくい人のまちろそ代うくく紙ちゃ　ろと云心や
一なすくうとうちまくくと云心や文なすくうとうちまくくちど

云ハ離ずべきするあきやなどいふべし

一なすび神からふかるから　内裏ならバ太政の北方へかゝる
からなせ也。されバ実ハきまりもじきや。二条院も大内ならバ河に
の方也。天一神をのぞく。中神ハ中央の神也。長神安就也

一中川のよるから　今ハ京極川也

一なげしのきはも　座敷よりの下也。きはをさねともなげしといふ也

一なすうけ　きるへきもあれりと紀也。られるべき所也

一なすくくるしき　あるべきらんる心也

一なすめから　あれ神ふる紀のさ海也

一なするかわんらくまきて　ひらくそねのふにうちなぎや。
ほけまれ不審なといふから　一ちいざしるま。うしえへのけ

てあはげあてところ也　一なせくあく　あれつる也
あ給さちど同心　一なげの川ぞげふひあげの面
きけいづれもあげやうも海の心也

一なからんひ　農也つくられる一生もたならい　金剛蔵王権
現ハ過去釈迦現在観音・当来弥勒也　弥勒ノ出世の時地に
あるべき金を海より持神也　一なまかじの院　きんじやう
そこなどの人家心也。河原院のこと也

一なぞいめん花　実一許に内証時のかるさも姿をぞれのちぬ
将のなずなんあり名倡をいふ。養きまでのあせる後将さが
ゆゑ。名をきもれてあれるとや。此次に御口ひとの為になど云

一南殿のさくら　世継云。貞信公のする武徳殿の松原を貞信除と云

一名は、毛の生ふるようにて、お勾(タナ)をもて引ぐむ、勅使(ヨウシ)なりしが
のち人(ヒト)形(ガタ)をうるもあり
一名をまゆみのかつらをもて
るもあり
一名を念珠(ネンコロ)にするもあり
一名をいづれの世(ライセ)のものやら
一名をさかしら男(ヲ)小山(ヲヤマ)治助見栄花物語
一名を富士(フジ)の翁(オキナ)といへば、浅(アサ)ましげなりけり
一名をさけるを人もちゆえに成人(セイジン)せぬの心也
一名をよびをごに、いろはやおの今の序(ジョ)よりもふ人のおらる
一名をどうもれもするごとに、ぜまでをしるごとくもあらん
法氏の四十二章経(ブツ)をもてぶつぶつをごりもするもまぢる経ぞ、ずく

れうあれどもあえぬのふところ
一名をでこぼこ、ぶえうづもちこうに、ろそこ
ハ玉(ゴ)づくりするをさこうハ勿(ゴツ)せ、つもり心やく人のいうもべき心
也、碁(ゴ)のこうも同心也
一名をもれもれるごとも
一名をうるさ、のすち 中古(チウコ)のす
一名をうるさ、也 大宅(オホトノ)世々 一名を教訓(キョウクン)坊 昔(ムカシ)ハ大内(オホウチ)にて、物(モノ)
山ぶとといふ、今ハ、ぶとのおとくい、ぶとハむくつけき心(ココロ)也(ナリ)
一名を侍所 これをみるさ女房ごゝろあり、一名を天照大神(テンセウダイジン)
ぎごゝせのおとてのやうぬべし 一名を俗(ゾク)にいふ
一名をもどうもするさいうちさ
はゞ(ハヽ)のみるさをもれバ、浅(アサ)ましきものなり

一なをゝもらうへ　表裏同色の濃也　花も同濃也　花よりいろ〳〵今やうのいさゝめをいふなるへし　それをゝ〳〵冬やうの色ゝ表同色ともいふや　一七日ゝもらうへ　白馬ひろまりのゝち　天武天皇十年正月七日御前ニ而ゝ　一なやらふそ　追儺　十二月晦日　除夜に儺を追事也　鬼やらひとも云　追の字をやらふともむやう也　儺の字をなやらひともむや　始自禁中追諸衙　一名ゝもらされおひ　音ゝ名あるを玉笥ともゝ　名を抱ゝ〳〵石笥ともゝ　落花形鴛通夫ともゝ　名を抱ゝ〳〵

一内えんちう　正三月中に清涼殿にて文人をめして詩を作り　海せうあり　王上并狩衣　信西ゝ行て　後ハ給ゝうや　花宴

一なをゝもらうへ　十の説を中ゝ　周中ゝもらうへ　是ハ一ゝもらうそ

一ふゝ氏八九十返中の説と為中をゝ　ハゝ〳〵ゝもらうへ　すゝもらうへ　中のをゝ〳〵ハゝもらうへ　細ゝもらうへ　志神秘説也　一なをゝもらうへ　中納言ゝもらうへ　ふゝ氏ハ紫震殿也　芳宴の例多　宴事是初也　南殿芳宴の例　村上康保二三年南殿ニ而芳宴ニ時探韻例　延長四年二月ホ例也　又芳宴ニ而ホ

一南殿の桜のえん　南殿桜ともゝ　之南殿ハ紫震殿也　芳宴の例　後撰弘仁三年神泉苑有花ノ宴事是初也　南殿芳宴の例　村上康保二三年南殿ニ而芳宴ニ時探韻例　延長四年二月ホ例也　又芳宴ニ而ホ例　天暦三年十二月右ゝ地下ゝ殿上ゝ堂上ゝ

一なす紙あつくひまいあひだ
ごろも　一哥ありけさうびの
むもひこもりすいは吉備公傷ふて
哥を三反頒て下ぐへのつま紙詰ごゝろ
一夜のれるを　本哥妻め服もこまやかなるもの心ざし
をもいふこゝろやうるもの心ざし深ようべきさるもの
ひもごろ指るをそいは夜のひも摸ごろこゝろにて
うべし　一帥船の絵を用ふる定め宮后崩れ喪にれ堂用
白次をト襲をハ着しめず　花周成主の時周公且東処に入給事を
一なす紙面風やまず　哥
引のべり在帯書

心得ごさうし　一祝おふる方業哥を本哥にてよめるべし
能写ごろ　一内大臣にるり前め　花大納云
数さまりて西よりぬりんにあるくて待ら内大臣に次
ゆくごろごいは大納云ふて内大臣をうけるやさてまろや
そ指政志のべき定あれごと　一するごけさ躰いはいぐさて致仕
大臣をるり給や弄　数ごは右大臣乃大臣
のるや依ごに関右大臣の官をるり心るり
一なすれをごろいれ門佰ありそ中れてごろいふ事ダ
当右大臣なれごも　一まる大政大臣にも成あべきや
一なるごれれごろ人　花代始ふ八十鴎条ハ雑波にる典侍
の人れ衣をもて参向して解除するるこれ乱雑

波のさゝへの例や

一七瀬　七瀬のさゝぎ今の世よ

七夕月さゝぎ糸もち糸の七瀬さゝぎ糸中

1あらハ語らでさゝぎ心乱れ祓賀茂鳴滝乱島雅波志

賀鈴鹿山はや

一七日れいさゝび　寿寺始め

礼のさゝや或ハ七日ちどさゝぎ糸結人もあるべし

一なべて世もあされ　世もれ出るぢちよび治ても男女のもど

りをもどし　斎院1城の人ハ今もちひしきを神のいさゝ名

一なゝもの　風俗唱歌

そんれ心や

さゝやちさゝもや大宮ちてちさゝおさゝのもり

さゝ一沿ともるもさゝや　二沿あるふ海えんともや

みさゝれ三沿或ハ家と寿不詳也や祖ぢちもるべし

一なゝさゝぢを中の号れ障まや

一なゝをゝなぢ文ゆゝさゝわて

さゝ1の字治右符記妙吉院桐岡ハ雪夜をゆゝさゝす

文ゝ糸沿ぢ直衣をゆゝさゝずして

文ゝ糸沿ぢ寿六位禁文ゝ文ゆゝさゝわてハ祖のさゝや

さゝる紙一ゆゝさゝや一祖れ祇

一むゝれこのさゝとゝいの中れ兄さゝや

一なゝふれあやよ御文ゝ気力校文勤池有波文氷尺開

一なゝぢれほさゝるぢさゝこハおもて紅梅ゝゝ香やび比

の袂も卯ぢれをさゝ人のひけのゆハ

一なゝぢゝさゝもさゝめ蛍れ

一なゝぢれゆぢれ文ぢゝさゝや

若葉の名ハなきし　この葉まくらさら唐衣や　然ハ薄萌黄
ミ河海よりてわ遠なし　　一なにはこそあれちかくなささハ
えきぬ許也　　一夜の月なきさほどハ細　夜のう
ちも猶しされバ秋といひ秋の中もあつさ時ハ夜といふ心也
一なくてあか　名に立や　　一みじかき　長哥や　長哥短哥
のりす家くの口傳ねるにまで然も三十一字の哥を短哥と心うべし
一内侍のことれ内裏づくへ　系内なくても　内侍の官でアうくろうすき
一内侍一わまことお聞ろれて　内侍司の中ニ尚侍典侍掌侍女孺
此四等の官也　霜月にハ女官也　内侍のことのれと人系つどふ也
一哥　なごそく　紫ハもいはさせバ色よくなりゆへや
一哥　いなめすり　うきかき人うきかきハきざしくるとれ　哥也

一卅哉のうへハ
なかくおつわや　中くよそくあらうか来てこそく名によそや
一哥　なまとうや　惟光女なとしく名そあつひと云　名も忘侍しとや
一哥　なれこそとし　ましし水ハ古く　清水や
一哥　なすさ人の　八雲抄云　はしる水といふしねれ水と云　小井也　いそう
小河どと云也　遣水するとれ　浅くてなかるるを云也
一若と　なすほしきることへのなかしひまそぐく　弱　常れ人のなま
てぐまおきろそくお聞ゆるよまして上臈なるどれ　をすいいふよ及
どれなりや云ろ
下まて昇するまや一夢合然　　一内親王　哥　同云　女已後も親王宣
　　一なす代おれりろ雪　ふ懐語処将
残雪衛府敦忠前　未看塵　庚桜の花ま　子城ハ小方ノ城衛敦も
白系天
出るするとこ家のつとや　人の未明ハ不通ろ　ちりもるるとなき也

一所
一そうそうと　原の心いかこゝろ
　心ちやもうろうあるよと釈の渓雪こ心のこゝろれいへこゝろ
一やういけう　心教もち
一なんちぐ〜こゝろも　心意を相
　まよ仰こゝろぐ〜の名こゝ　こゝろ
　仰こゝろれこいひ〜　一
一きぐいうん　名対面　仏行路
一ぶつ次第ぶつ一員近清僧も　説来月ノ〜　仏同　兼中か
　行年
　初ノ者ノ弓弟仏ニ　へ仏こゝ浅・王卿名対面・仏同空張満不眠ニ弓
　第ニ名獨ハ行路の時ニ
一なくくも　床ニ鳴のこゝろ
一ちやこゝろん　るやこよおちぐ
　竹川
一ぶつそもぞ　なこゝこゝろぞ　仏ぞや　つこゝ有て辞こゝろ　咒

一こゝろ
一中やこゝろ　南都ト仏人宇治ヲ中やこゝろこゝん
一なこゝるもうち　史記ニ曰　菩薩摩訶薩
一ぶつよぐ〜の会仏不動念仏こゝろべ〜
一ぶつぐこゝろ句を　温槃般　阿含経説同空流行　是ノハ生滅
　法生滅ノ已寂滅為楽　雪山童子来法爪飢こゝろ食ニ
　て法を学ぶ石ぐる書付ぬこゝろ　鬼ハ帝尺童子ハ尺迦や
一ぶつぐれい月心こゝろぞて心　抱ぐれいぶつぐこゝろ我もみ〜来
一なよぐ〜れみこ　西文尺行ぬ
　いるこゝんぶ咒
　これいぶなこゝねこゝろもみこと　西文尺大尺　庭井霊物降居樹上ニ
　詫前後小院頭ニ　開法ノ侍ラキ立ノ　ぬ仏者之
　小院頭　唐廊ニ美武こ奥や校　ニ先尺ニ流泉典ノ
一ぶつぐ〜抱とり　空抱ノ　賜尺式ハ

京官の除目ハ後執筆をもて行也或ハ除目後再三月経て
まあちえ麦除目参議事あ氏ちまゝす加執筆といふにや
一 なかうど　中びとうれまても善キにてらう言あらうどれ
一 なかぞらにて　武官ハ武氏　一 なかぞらの君　あ氏君が紀よう
つわてまびいろよりひろうなよ如くるも
一 なかごもり　三十ヶ日九織よ觸也
一 中にけりそて　大底四時ハ心総苦就中腸断是秋天　白氏文集
一 なとくねうきしにほよ　接仙窟にかれもとひらせとこうて云是
一 なよう僧都　横川恵心院源信僧都にてもうも
一 なまよりうれえんよ　法花経ニ依テ種従縁起云々

源氏目案巻第四

ら

一 らうらうげ　いとらうらうしきあどれ心やかめくる心やかげくとなるや
一 らうらう　労あるもいとらう心あるも
一 らうがはしき　らうがはしきあるう心や
一 らうのうへ　廊下也　一 られへうし　羅表紙也
一 らうくじう　良久しき也あけばらしよやうらうらうらうらうか心
よらうまうさ方よられるも
文砌紅葉欄　白氏文集　一 らうとめぐれるか　繞廊紫藤架
うらうらかなるもあるもらんさうど一よ穢　一 らんさう　乱声　らんさうど
一 らまれ君のらんの君也仮名にいむよと用也紫苑色なりや
一 らてん　螺鈿いはすりてつけたるや俗書貝といふ是也

一らいこうも　菓子ぐつ物や・墨・楊子・ろうそく
ちをろくろくろう物や　一らうめうろう　廊下や
一らうげ　老女や　一らうらう結ひずろや　ろうそく
ろうそくやもろ　一らうろう　宰領

む

一むねおくまで　むねのあく　文衣の在世ごろく・涙をつれて
一むりんろくるぶくへて　文衣の在世ごろく・涙をつれて
糸内志ゆへろや　一むつびむつびくすろくを也
一むりん教との外せろれろをもろれ　親主ハ一ぽんうち四ぽんで
いまぶや・よぶよおろうとびよぶよぶ　一ぽんうち四ぽんで
も両方ぬ教勢を外歳と云・外除の心ろち

一むとびつろ　源氏と書のとの世ろ・ろろさぶい元服の時
のまくゆひのよや・おせそいよのろくずを・涙の心ろくずろや
男女のまくゆひ・紫の糸ろそ
一むつれむろくろや　一むけよ　毫下
一むつづく　むつろくろろや・親云
一むりのよろろくる　よぐろのの泪ろあくろふかぐし
一むぐくろく宮く姿や　一むさいろ完ろろと兵衛
一むくつひろ　物そろくろをぬや　一むつろ　貪　白氏
一むつろてろろうや　一むつづれて　くよれてづろ
一むつろてろろうや　一むぞんよ　毫盡
ををや　一むねくくろろ　家のね・
一むべ　ぜよや

まみていとおもるあるるの心地
一ひるねをうんへんうゑ　三條（ジョウ）の中納言（チュウナゴン）或（アル）ようにおはしまして
三條の北の御門（ミカド）にもちゐ奉（タテマツ）るや　一むしろ物語（モノガタリ）などにて　寛平（クワンヘイ）
雲まて（ミヤス）れ奥（オク）ふかき夜（ヨ）のけしき　法皇（ホフワウ）河原院（カハラノイン）にまし〳〵ける時（トキ）　融公（トホルコウ）
うそ心のあへ（キエ）ぬ消（キエ）うせぬるかな
一ひろのま　室（ムロ）のや
行（ユク）女（メ）仲忠（ナカタヾ）の十（ジフ）あまり六（ムツ）つにて父（チヽ）母（ハヽ）をとられてあこれうへをよ
うやおたにて　出（イ）こたもあるへき声（コヱ）をあけ滅（ケ）入（イ）るやうに
人〳〵そうふ
あくそそもろ物（モノ）ゑ〳〵ふれいをやあひのそれ

一むしろとうちひ　なをき
ぎぼ〳〵ゆそうこうこひ物（モノ）
とあ氏（ウヂ）ぞ〳〵そ〳〵　水（ミヅ）ゐや雲（クモ）
ていあ名（ナ）をうこあや　雪（ユキ）風俗（フゾク）の方（カタ）と祭（マツ）る　求（モト）め渡河（ワタルカ）舞
うて　東遊（アヅマアソビ）　風俗（フゾク）　別（ワカ）のすやとそ梅（ウメ）の実（ミ）のぞ　こうき
の山のこうこひ物（モノ）ひうちけ文（フミ）とうこひ心（ココロ）や　三笠（ミカサ）の杣（ソマ）
ゆ〳〵まうち出（イ）のへ〳〵雨（アメ）ひうちるれいをへてひうちの文（フミ）といい
まゐ〳〵こうよし心（ココロ）
一むしんのさうこのほそあづ　織（オリ）
物や　猫（ネコ）なき面（オモテ）うすく　裏（ウラ）いこうさ　薄（スヽキ）芳（ハウ）や　細（ホソ）長（ナガ）い　幼（ヨウ）の　女（ヲンナ）
子（コ）もれ　紙（カミ）　ゐて（ヰテ）ふうすくうをはうくうをとうやし
あひだ（アヒダ）
一むま場（ば）の物（モノ）ぐ　紙（カミ）　物（モノ）そ〳〵　雨（アメ）屋（ヤ）そ　だたの馬場（ばヘ）うそ

二月の騎射の時、中さ将の着をする衣、袈裟、大内のぼも、
小の陣そそ、一条をあへとそろよりて、たをし、夜の狂をひる
ひめや
びをろうそいろも
一むらひとそ　當服くもや
一むもんのうへのれそ　平安改乃
一むらさ紀のこそめの　紫のも
絶い衣穀冬、平絹、色いつひ
一むもんのれそ　今源氏
一むらひとそ　當服くもや
一むもやれおさたくらすろ
何黄表捕心仍志や
なるそうち活けるよ、むまやのおさいうぐいすくろ紀をいん
一そいくちのくる　驛長奥鷲時衣敗、工学一落是脊硬
哥なと、ひくり活い澤地ふ、黄亜松の松をひくれるる
ちすくへくるや
一むらひとそ　海西
史記曰大名そ下久不居、後漢書曰、伝導身危賊多令下名、
文選曰、木秀於林風必摧之、行高於人必非之　運命論
一むーれ衣のれおぐち中務字　醍醐ゐ中務兼明親王也
在大井川に山親王を明名のこ
一梅のおち枝てふ鳥こびちぐひ
うそうんのそうおよ、そそうそ紀を重そうや、紀とこいこむ、
のやうそ詩や、拍子をいよ、恐、今文節、
一むーれくそ人ぐに流人

こゝは紫のうちくもりハ光氏あかてうつしてありや字を白に書き…
れバけふぞしミゆべきや　一 むらさきのゆへ　むらさきハ源の氏
ひすめらや紫の一もとゆへの哥　一 むねにまぎるゝ　おどろかさで
ゐこゝろや　一 むらひめけりて　人の腹立に
我も腹立するや　日本記 日本武尊東夷をうち時ノ火に火を付
さるゝおもくよりも火を付たりけりや
一 むらさきゆかり　住吉の物語のすぐ　嫡女をバ父ハ思ひしが
継母のいひしよりて　もらひにまかりけりや
一 むらさきの物まかりけり　後撰云大納言国経卿の家に侍
ける女に平定文いとしのびてかたらひ侍て　行末まで契り侍り
けるに比頃ほひ女に贈太政大臣にむかへられて侍るなれバ略てしまする也

一 むらさきにかぐとい　かゝといひけんどハ紫のゆかりと云ところづけがと
いひべし松らちるとハ松より咲うす藤あれバや松を待まらせるも
一 むらさき例をあらしめて　藤おもふ中ての待に改不改二の心也
源氏ハ紫式部大臣あれバそれにおもらしめて院司など補をも
れつつ心や文殊に太上天皇の昔の例をおもらかずして院司など
き定られつゝ心もうごやそこ　一 むらさきの雲に　慶雲
星とて天下一統瑞にミゆるやうや
一 むらさきもやうなるそらひには　是ハ嵯峨天皇の女に文かう
しろしをそへひて忠仁公を婿にとらせてまいへり
一 むこの大君　嵯峨の聟どのもんこすれバ太上皇や文太上
皇といもんこすれバ又臣下の婿のあるからといふ也…

一むすめ抱ぐちをも抱えさせるを、花七歳四つをと、
出浦経地功徳残を施入されしをもて
一むすめのせたこと　等しく考うるときは
一むすめゆえおのれ二疋人の孔湯にまいりて後れむすめ湯
宣旨まいるや先明石上のまいるなど
一むすめ　馬そひへ前時中おほどの着と云ふ
一むすめよりへいあるうちをもびて　糸書云・琴動二天地一感
鬼神一云
一むすめのせたもるくやい　侍従地取る業平の二条后をぬすみて
一むすめ抱がうりるも　さよく無情
一無言太子　はにあ無言太子波羅

奈王子やま名体艶容端正生而十二年不云
一むすめ抱ぐちをも法花経を取りて中ごえ
一むすめくさすぎ俗ふされむ
一むすめ抱ぐちをも　うちの池放る
一むすめ琴ーを今ある老いふ人
一むすめ　ぬばゆるまで
漢武帝ふ董仲君妻ふ人良伝温石
一むすめ別をるひてそれを観音御室周伝の着人
みておりまけるよ絶妙の為よろされればこれお
やのそねをひようけて　伝道よ入給ひ
一むすめは生田川のおる人まで家元大和抱ぐちる

一むかしこそうひと〻（昔僧侶）或いは元云昔深夜后皇佐れるやこの時金
峯山（ブセン）より久吹（ヒサシュ）緑行者（レンノギョウジャ）とて年（トシ）幸（ライ）の行業（ギョウゴウ）を廻向（エカウ）して鬼（シニ）ごるわり紺（コン）青鬼（シャウキ）と云（ユ）ふ伝（キタ）
そうづ（ソウヅ）なけう（ケウ）仏智（ブッチ）澄大師（チョウダイシ）わんごう（ワンゴウ）衆誡（シュカイ）給（タマ）へれど
納（ヲサ）ざる鬼（シニ）ども多（オホ）くありて〻（テ）この（ノ）座（ザ）のやうに成（ナ）て
こそ（ソ）よろこわ（ヨロコバ）ざりの（ノ）後（ゴ）佐（タス）けのめ（コトク）よ成（ナ）ると云（イ）ふ（フ）答（ゼン）おも（シャウ）ぜ（ゼ）ざる（ザル）こそ
一むかし（ムカシ）ものうち（ノウチ）位（クラヰ）高（タカ）き（キ）僧（ソウ）の仏（ホトケ）ごうの（ゴウノ）ごとく
う（ウ）へ（ヘ）人（ニン）数（スウ）よ（ヨ）へ（ヘ）ど（ド）も（モ）雲客（ウンカク）こそ（ソ）多（オホ）く（ク）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちわ（ウチワ）ゐ（ヰ）ども（ドモ）女房（ニョウバウ）衆（シュ）を云（イ）ず（ズ）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちつゞ（ウチツヾ）くこそ（ソ）あやしく（アヤシク）ざ（ザ）れ（レ）

う

一うちつゞ（ウチツヾ）くうちつゞ（ウチツヾ）くこそ（ソ）あやしく（アヤシク）ざ（ザ）れ（レ）

一むかし（ムカシ）ものうち（ノウチ）位（クラヰ）高（タカ）き（キ）僧（ソウ）の仏（ホトケ）ごうの（ゴウノ）ごとく
う（ウ）へ（ヘ）人（ニン）数（スウ）よ（ヨ）へ（ヘ）ど（ド）も（モ）雲客（ウンカク）こそ（ソ）多（オホ）く（ク）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちわ（ウチワ）ゐ（ヰ）ども（ドモ）女房（ニョウバウ）衆（シュ）を云（イ）ず（ズ）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちつゞ（ウチツヾ）くこそ（ソ）あやしく（アヤシク）ざ（ザ）れ（レ）

一むかし（ムカシ）ものうち（ノウチ）位（クラヰ）高（タカ）き（キ）僧（ソウ）の仏（ホトケ）ごうの（ゴウノ）ごとく
う（ウ）へ（ヘ）人（ニン）数（スウ）よ（ヨ）へ（ヘ）ど（ド）も（モ）雲客（ウンカク）こそ（ソ）多（オホ）く（ク）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちわ（ウチワ）ゐ（ヰ）ども（ドモ）女房（ニョウバウ）衆（シュ）を云（イ）ず（ズ）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちつゞ（ウチツヾ）くこそ（ソ）あやしく（アヤシク）ざ（ザ）れ（レ）

一むかし（ムカシ）ものうち（ノウチ）位（クラヰ）高（タカ）き（キ）僧（ソウ）の仏（ホトケ）ごうの（ゴウノ）ごとく
う（ウ）へ（ヘ）人（ニン）数（スウ）よ（ヨ）へ（ヘ）ど（ド）も（モ）雲客（ウンカク）こそ（ソ）多（オホ）く（ク）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちわ（ウチワ）ゐ（ヰ）ども（ドモ）女房（ニョウバウ）衆（シュ）を云（イ）ず（ズ）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちつゞ（ウチツヾ）くこそ（ソ）あやしく（アヤシク）ざ（ザ）れ（レ）

一むかし（ムカシ）ものうち（ノウチ）位（クラヰ）高（タカ）き（キ）僧（ソウ）の仏（ホトケ）ごうの（ゴウノ）ごとく
う（ウ）へ（ヘ）人（ニン）数（スウ）よ（ヨ）へ（ヘ）ど（ド）も（モ）雲客（ウンカク）こそ（ソ）多（オホ）く（ク）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちわ（ウチワ）ゐ（ヰ）ども（ドモ）女房（ニョウバウ）衆（シュ）を云（イ）ず（ズ）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちつゞ（ウチツヾ）くこそ（ソ）あやしく（アヤシク）ざ（ザ）れ（レ）

一むかし（ムカシ）ものうち（ノウチ）位（クラヰ）高（タカ）き（キ）僧（ソウ）の仏（ホトケ）ごうの（ゴウノ）ごとく
う（ウ）へ（ヘ）人（ニン）数（スウ）よ（ヨ）へ（ヘ）ど（ド）も（モ）雲客（ウンカク）こそ（ソ）多（オホ）く（ク）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちわ（ウチワ）ゐ（ヰ）ども（ドモ）女房（ニョウバウ）衆（シュ）を云（イ）ず（ズ）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちつゞ（ウチツヾ）くこそ（ソ）あやしく（アヤシク）ざ（ザ）れ（レ）

一むかし（ムカシ）ものうち（ノウチ）位（クラヰ）高（タカ）き（キ）僧（ソウ）の仏（ホトケ）ごうの（ゴウノ）ごとく
う（ウ）へ（ヘ）人（ニン）数（スウ）よ（ヨ）へ（ヘ）ど（ド）も（モ）雲客（ウンカク）こそ（ソ）多（オホ）く（ク）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちわ（ウチワ）ゐ（ヰ）ども（ドモ）女房（ニョウバウ）衆（シュ）を云（イ）ず（ズ）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちつゞ（ウチツヾ）くこそ（ソ）あやしく（アヤシク）ざ（ザ）れ（レ）

一むかし（ムカシ）ものうち（ノウチ）位（クラヰ）高（タカ）き（キ）僧（ソウ）の仏（ホトケ）ごうの（ゴウノ）ごとく
う（ウ）へ（ヘ）人（ニン）数（スウ）よ（ヨ）へ（ヘ）ど（ド）も（モ）雲客（ウンカク）こそ（ソ）多（オホ）く（ク）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちわ（ウチワ）ゐ（ヰ）ども（ドモ）女房（ニョウバウ）衆（シュ）を云（イ）ず（ズ）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちつゞ（ウチツヾ）くこそ（ソ）あやしく（アヤシク）ざ（ザ）れ（レ）

一むかし（ムカシ）ものうち（ノウチ）位（クラヰ）高（タカ）き（キ）僧（ソウ）の仏（ホトケ）ごうの（ゴウノ）ごとく
う（ウ）へ（ヘ）人（ニン）数（スウ）よ（ヨ）へ（ヘ）ど（ド）も（モ）雲客（ウンカク）こそ（ソ）多（オホ）く（ク）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちわ（ウチワ）ゐ（ヰ）ども（ドモ）女房（ニョウバウ）衆（シュ）を云（イ）ず（ズ）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちつゞ（ウチツヾ）くこそ（ソ）あやしく（アヤシク）ざ（ザ）れ（レ）

一むかし（ムカシ）ものうち（ノウチ）位（クラヰ）高（タカ）き（キ）僧（ソウ）の仏（ホトケ）ごうの（ゴウノ）ごとく
う（ウ）へ（ヘ）人（ニン）数（スウ）よ（ヨ）へ（ヘ）ど（ド）も（モ）雲客（ウンカク）こそ（ソ）多（オホ）く（ク）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちわ（ウチワ）ゐ（ヰ）ども（ドモ）女房（ニョウバウ）衆（シュ）を云（イ）ず（ズ）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちつゞ（ウチツヾ）くこそ（ソ）あやしく（アヤシク）ざ（ザ）れ（レ）

一むかし（ムカシ）ものうち（ノウチ）位（クラヰ）高（タカ）き（キ）僧（ソウ）の仏（ホトケ）ごうの（ゴウノ）ごとく
う（ウ）へ（ヘ）人（ニン）数（スウ）よ（ヨ）へ（ヘ）ど（ド）も（モ）雲客（ウンカク）こそ（ソ）多（オホ）く（ク）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちわ（ウチワ）ゐ（ヰ）ども（ドモ）女房（ニョウバウ）衆（シュ）を云（イ）ず（ズ）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちつゞ（ウチツヾ）くこそ（ソ）あやしく（アヤシク）ざ（ザ）れ（レ）

一むかし（ムカシ）ものうち（ノウチ）位（クラヰ）高（タカ）き（キ）僧（ソウ）の仏（ホトケ）ごうの（ゴウノ）ごとく
う（ウ）へ（ヘ）人（ニン）数（スウ）よ（ヨ）へ（ヘ）ど（ド）も（モ）雲客（ウンカク）こそ（ソ）多（オホ）く（ク）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちわ（ウチワ）ゐ（ヰ）ども（ドモ）女房（ニョウバウ）衆（シュ）を云（イ）ず（ズ）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちつゞ（ウチツヾ）くこそ（ソ）あやしく（アヤシク）ざ（ザ）れ（レ）

一むかし（ムカシ）ものうち（ノウチ）位（クラヰ）高（タカ）き（キ）僧（ソウ）の仏（ホトケ）ごうの（ゴウノ）ごとく
う（ウ）へ（ヘ）人（ニン）数（スウ）よ（ヨ）へ（ヘ）ど（ド）も（モ）雲客（ウンカク）こそ（ソ）多（オホ）く（ク）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちわ（ウチワ）ゐ（ヰ）ども（ドモ）女房（ニョウバウ）衆（シュ）を云（イ）ず（ズ）
一うちつゞ（ウチツヾ）くうちつゞ（ウチツヾ）くこそ（ソ）あやしく（アヤシク）ざ（ザ）れ（レ）

一右近のうき　禁中まで行の一部うき右を清涼殿を始てなり
まてまでいくもやそれをも丑の一刻ともよ丑の一刻ともよ宿直をとる
しそのへすもやそれそれとのおよれ寅丑の刻ともよ始るもや右近の
司ハ卯寅までやおもり
一うけのくちびる　簾子すも
かめもへぶそへぐへ人の刻をもれいまへ
味めづさもや
一うへてでやめぐき添をあまち
寛平ノ遺誡曰外記ノ蓄之人必可二召見一者ノ在簾中一見ヲ二ノ巻を
まて河海ニ云ふ寛の詞ハ不文を遠と云ふ若必の字かきずして叶
まづさはのもや然いかまもそれそれとうち云ふ
一うけとりて　諾受強お前の心

一うへの命婦　内命婦お命婦ともよ内裏ニ仮ずまを内命婦
とハいそれをへの命婦ともや命婦ハ后の書ふめうふ
一うちよのこまひよう　内裏ニのみあうへふのみや
一うちうの　やそへまへまるを
一うめうまう　乳母おうめうまう又伝をも云ふまへまへ
一うへいの乳　量の人ともよ
一うまづ　海のもやの河海頻
一うへろふ人の心のうへもうふふふ云ふ表ふ乳母ふうふ
もも云や月のうへふへうふ又月の乳のやうをも云や
一うへづく　乳納ふうへ　一うへ紀人　かの人紀人やも
一うへく　うへうへふ

一うらもるさ　何心もなさそうに同じ心なるや
一うちそふ　風もさそふいもせの
一うねと　知すや
一うちそそん　そそ
一うれそく　うれそくれそ同じ
一うつもこの　分をふとつち
一うつもこのそる　俗集うる　浦なうれまつもそれど蝉も
一うつそく　優婆塞　俗ちどく仏身みよ人々も　尚末も等
一うつそく　仰でなむ声　そそそて　弥勒の出世
一そのちぐうせそ　一うらむしろ　ちさ人を延て
一つそ　外へうつもや　俗ころいむしろとつふ同じきん
一うちうつそるう　夕ぐれめ
一ちとい　夕ぐれめ　娘や
一うつもこの也　むすもや
一うつそ　優婆塞　あの
一うちすそ　ひもの
一うへそひもる　うへ　尼うへとそのけうる
一うちさ　御　大小あり　御　御
一うけそ　呪咀

るすといへり　一うつしものくる　源氏の…
ときうつらうつしとかくるや　一うつろふ心ちして　源の…
つらくもらる邪気をうしや　一うちふして　びんくむ給ひぬ
生海や　一うき人　女房人　哉　宇女女房人
さいつまいひされど、女房人ハ、宇女ともあるべきを女官や
一うんめいそん　哉　是ハ中比宮氏へ参氏方にある殿にて陶詩
下のまりまず下や　一うつし心　現心也
一うちあり世る　斉宮の人　ばハ草氏原までも竪めぐるまする名の
よしありとあるハ名のかずハ君もしさやさうくるや
一うれしき抱かへ　ときれ人の声さハきうちなきうれしき抱かへ
けふの勝月とさうしてさまれ心をしくめるき

一うきまんのかんの方海　哉　今案、童女ハ晴の時も打袴のちよ
哀袴をからうきまんハ窠穀やられて子にハ上れ袴をださいでむ
打袴といへるひされ袴や　一うんてん院　河雲林院ハ淳和の
離宮や　仁明天皇の家かしき給
一うつしぎ海まで　うつし心ばまことの心やうつし心なるぬハ狂乱也
一左近のさくらの房人　左近亜の房人中川記侍るり中侍らず
がんや叙爵もとべき源除名に依て諸名れをけづられてを
一海のかすて　かすまぬのさもちうくんやうる　定家の明月記ニ云
脚融比電光張衾云ろ　一うきれ中氏あうちまれ　是を哀
火ろ出見尊を海氏まろ人豊玉姫のをあらきなかし
をあしれめ石のやまるずきへてけり神や

一哥あり
うらゝまつ秋の花任当の秋ハうら梅のホテの垣根うるうる
ひ出のくる秋ちるようて海るまつ秋とハ申ても又海中ハ詠る
まつをそのまゝうらゝまつるあれだ詠るまつとハいわんこお遠
あるまじ哥也八百舎ハ八重のごとく
一海よりもさきにのぼり花水根哥方士の棚乗妃をのぞめ
一時のまよこ着碧落下者蓬泉とのぞむごとく
一哥
うらゝまつのこの松よりも波のこゆるい事ハ松山よりもうらゝを
哥
うらゝまつのこれ花やうらゝめるといおゝれうへのまつをいう是
一哥
うら松や海松ハ浜うらのまつ
一うへのまつもひさしくもあけもみどりと伯る
うらゝまつへ人をのぞまよこ云也

一うらゝまつ 物名也
如房とハ典侍掌侍等也前ハ右とうへハ右を云
一うらゝまつ松まよこ文選よ馬鼠松とうらゝまつ松と
いうこ伯ちる鼠ハむまれそだつごとくまつをすごにいき
うらゝまつ云也そのつまよりうるわ松というくちを
へいつれ松とおさへうへのまつとうらゝまつのうへのうこころ心ある略く
あるまつ
一うへのめ名 哥同前ど人志
あるまつとうへのめ名と云こ何海こあるとそうこうや一哥也
よりへのまつまつとハ何ものぞ
一哥
鶯のさえづる哥 辞ハ和訓れば古院おりまつまつをむつ

れー笑ふ
昔よ友ぢの心ぞとめそ
一うさ消を うさ消ハ兎ニ名所ニうさ山ありと云心や
一うつさえひらくめく うつさまもる兎
一うちぐれ 聚楽ノ 名所の哥ども
一うすぐろ 柳ハ葉ニ ブヨウニイヘル 蘇鉄池如シ
一うすづき 雑木窯ノ人や
狂文集
一うすれ衣 うすれ衣氏よあらず一世源氏の人の女や更名迄
うすれの物ぬよ衣家ぢて一世の源氏ぢて右大将まさちも
と云人をおもひ二人もちの子ぢ人いお大臣の娘一人いお
出門のかいつちと石腹のあ一の心やと腹ノ切ぢて

あてごとと云心ぢれば兎ぢれ
一うつろく 夕陰ぢて心ぢてすぢ
へ兎ちめぢれば添かねと云人いお出家ぢて山ぢ籠ぢておこなふと云
一うち払 払炸 ウチハラフ
のうさ
一うつさもる
一打こめき 打当ヤ
一うつろ陰
一うつろへ やそと云心や打つけ用心や
一右とのぢんのこうろ 第一和ノ
うづまる 源氏物語ノ浮舟ノ巻ハ右を陣ノ中ハ海ノ色ニ比る
一学ぶ声ぢや 学の声ぢ共野曲のぢや心ぢれ聞ぢも葉ノ
ぢやぐ玉づこもあぐれー心をみぐー

一琴れねごれ　五多　笹竹ら只・落梅の曲のるや
笹のるる
一うまるれうをー　うま弦田のるをーや・ごめるろ・らて・
唐綺のるや　弦　白るれそといるるのるや
一うぐれ法ーのる　宇多ノ法吟和琴名物や　ワゴノスイブツ
若工
一うるまいりる人のるりをる　女れるごの入門の時を
若下
一うへの衣のろくけぢめるて　河　四位・六位緑袍やそろ
一うーろれるぐりにるるー　若宮のれ方いる沢よ望れそのう
ろろのるりろろ商や　一うちまるるぐー　来をもく

一滴汚のよがれ息有のるこを
一敷元まおのよやるとやるる・高・ら云ふ心せバ不可背只約ね
一うーるるびー　文ーまるろいまん
もふ空まてれるーるれ字てまるろや　岩うど・天の額
一うもて星と　令半九云・を君文
一うるる世ーよ　ゆるくえるんを吟
一うーてう　れ法の時・当を三ノ
一うぐくのれ　可いは物・曲い来曲や

一琴すびーをいすびいぐくや　紅梅
白文
一うつーて　焼物のるや
竹行
一うるひするる　当生声後引
一うるぐくのれ　可いは物・曲い来曲や

一うちすてく　此姫君遊のまゝをとゝめてわかれのこの世鴨のこ
まよせあくかうちの子鴨の子や
一うちあしといふ　うちあしとは詞は世話にうちと云詞にあられし
一うき鴻の　陸奥守にて下りし時の事をいふ
一うつし馬　殺の鞍置馬をいふ
一うき世には　我身は山居してもうき事を一筋やうに
まるしきことや
一うづち　持統天皇三年正月、天皇御二南殿一乙卯大学寮献二卯杖八十枚一卯槌の事
卯杖と用ひて年中の悪気をはらふ心にて杖を用ひ年中行する事
一内文　内宴
一うどねり　内舎人とかく侍の名也
一うつを　うつを見せ
一うき船とうき船といふ事の

ハ世にあり抱ちれども、ハかれは千々すてゝ此紀ま人あるもそ
ハかれ是にまよひあつて決定しかたきこと
一うちまれ人めして　浄土宗学法の人や
の
一のちのまき　七日くのうちのひや
一のちをきそちて　八月廿の大風の名や
一のりれ師　法の師　三国説法の首座や
一のきのつま　軒のつまれや。つまは抱の事しをいふや
一のそれれまひめずき　行来となく用ひるうなや
一のちの世のわざひ皆可のあらき施も極楽の教説哥舞乃
菩薩のうや
一のちよろこんまゝせ　ゑ十ノ巻の

時こそあれ、心なきたぐひ（若下）

一のうう二月ころ―ほそ馬をそ―らそらにうち乗りをのうらうらとうち霞みたる空の気色もをかしう

三月も落雲女院の忌月もれば又更行也

一のわうての世　おうての世ともいふも同じ事也

一のがうう―　のがうう―と　別れ・絶世をおうくうくうとおぼれこがれ

一のをうらんくうあうう―　春ほうとうる。礼記うをうる。

一の風賭うてう―晴るるのうれ里ずうて還饗行へうれはうて

一の夜ふけ―と　傍輩を法の師を引ぐして

うそうそふまぎふる

一のう抱　晴夜の勘物をめぐらすに女二宮のうす

一のう　をのう心

一のうめ　もの心

く

一くうづくおさめ殿　内蔵寮　納殿　兼好法師宮

一くうありうやく　退屈の心也　類の類堕

一くうあけ氏でうとめく抱うくる也　河昔の女房東

衣笄下常に髪をあぐるかうがいなどや。鋏釵なども。。
一くもゐうへも　禁中は洞にくれて月とゝもにすむ母后あさ
ちふの宮の月はなすることにすむとも心や
一くもゐのおや　玉親國母といへるすあればなべし。衣國のおやとも
かうとはすまれ海へうつされたまへるや。おほやけのはるゝめきは、摂政関白
の天子を輔佐してまつるや。源氏君はつねに尊号をえたまへる
しかばおほやけのはゝいめはそのわうふとも云や
一くわんさ　冠者や。元服する人をくわんさと書くるなり
一くださん　くだすへ下や　或腐ともかくべし
一くまなけるる　くもなきや。くもれるをとるにも次や

一くさもひ　種や
一くろ栖　菓子や。桐まれ紅や　一くろうざぶしく　おかしなる
や。極心に実なるはつましやかに。つまる心。つれになやしておかしも
にまけるさへくるで心や　一くびゆるし　それしげなるさ
とれ心や　一くれなゐのうつ　纐紬の腰や
一くちおほひて　袖にてかほをかくしたる様や
一くれじし　夕暮れじしまなじとられくれじと云心や。くれくれ日
一くさぐさし　細砕　一くちずさひ　口すさむことや
一くさんぞく　眷属や。けんぞくともかくべし
一くてき　を海のくてきや　一ぐりんもん　孔丈　花室明親王
家室ハ藤原氏四十九日孔丈後に相去朝經書之見文粹一生

者必滅、釋尊未免栴檀之烟、楽尽哀来、天人猶逢五衰ノ
日ニ此義又し詞や
一くしんくらとらしかうかいえる
爵を賜や。五位より爵位の初なり。花族人にてまゝ一孫内本ふるまひ
あべし。正月五日叙位ニ六位の蔵人ハ必叙爵して従五位下ニ叙
せらるゝや　私云　蔵人よりとのふるまひハ内すゝやかりうちか
ざるものまでと云詞や　一くりつきて　功や。こうのゝいろ
声や　一くるしのあし　百済味のすや
一くものそめてかやしと　浅黄なるかうハ早下の詞や。げをとりすべきこ
このはしきとそれ也や　一くしめ人が心のくるしかるすや
くわしと云ふ所色ある。又くんじくらきさる所色ある
一くゞせられて　很隠ニ女房橋をさすりなきやとれもる

めうしくわうしき稱也　一くわや　さしかゝと云心や
一くれなゐハかう　紫のすや。紅梨のすと云。紫の上むらさきや
一くれしくもりう人のすとりへう
一くわ被のどう　轂　老子曰三十輻共一轂ハ者君輪之正中ニ而為輻
之所ニ湊や　一くやしくもあしまゝ　あかひいあ
やさあつかひして　実にハ不會とや。されバくやしきとや
一くろき　くさみ　黒汗杉　女房服者の無ずく
一くもんざられて被　萱草色黄色也。服者是なくうれふるとるる
一くろすのとりね　俵のつきくうふ成云や
一くるつ外　うをさぶりくしハ實の心まてハらさきしや。深の偽せ
まづうぶさんとや　一くるされ車　服者ノ車也。板

車ホとぞや
一くろがうよもぎて　黒方薫を
うめ焼肥の名や
一官爵をとられす　除ハ流罪
いつまでもて除名とみてうち
や　此男もこのごとくおちさる
まるるをこ源氏も除名せし
名ハ左遷の例を用うや　菅
ますとりてきてやそ
冬の行ハ
一車ごとうさおろし　牛をい
一くろ　此ごとくのごとくて
流罪をされハ罪の軽重をさ
名いた辻の例を用うや　菅
ますとりてきてやそ
冬の行ハ
一車ごとうさおろし　牛をい
一くろ　此ごとくのごとくて

のごとく　檀那中第一香薫ぶりなる
い髪をけづりはやこぐ　幼ひ
ぐ　ほりて　ありてきて
一くろもられみてこくや　此ごとくのごとくて
ろ　ここのまて　禄の赤トや
き　行ちも物代こあ
ますべし　呼　兵衛の督玄又
一くろ　此ごとくのごとくて
仏正覚花子経功成名遂而身退者天之道や
一くろに　苦丹や　牡丹ともいふ
一くろもろこし　此ごとくのごとくて

面ともバ染・裏紅梅ともと云。さて云やうよくするとき多いくら。

一くろさういわりのさいくらやくろさ　うつもうへうぞさいわりのさいくらやくろさ　うつもうへうぞ

せくろぞへ黒くなるやくろさ　うつもうへうぞさいわりのさいくらやくろさ　うつもうへうぞ

一くろさむ　昔武士装束で、此日の節会行れて、騎射のすあり。

ま時宮門有典薬官人のやめ成敗ぞ門侍来ぬをたゞ下

ま抜時、くろさむを去の肩よりおりかけて、たの御へくられて、三の緒で分

て腰よりめて、各拝舞すると、続命縷と云ふり、此命を延ふ

いふひくろさするや

一まわくろさひくろの海　まわくろさ

とは、近江琵琶湖の海のいづれそこと云ふ。ひくろの海のいづれそこと云ふ

ま立いそんと云へるゝ

一くろぞあぐ　皮ぐ〜を黒木。

はせりづるを赤木と云や

一くろ〜人古参侍　近も四季わ

一ゆく行幸の時、武人右手に弓、左手に矢を持、後に添、後者それ使て、維一役中多人なしを

めくろ・そ行の心ふり

一世人酒飲我独清衆人皆醉我独醒

一くろ〜人不飲人皆飲

一くろ〜ふり　芝衣香くろ

一くろ〜あぐの門伯　勇云門伯

一くろ〜仏　国史云、嘉和七年四月八日請律師伯町大法師位

静安北院涼夜始行灌仏事、推古天皇十四年始、毎年四月

八日設斯会　日本記

一くろ〜ぐやうれ海して

来ゆくどのやうれ方ちくろ居君のくろねるをくろ

一くろ〜ぐ　摘と深く菊くろ行也、衆くろ深

氏ざハ非まゐき人のゆゟすくさしまてもゐきまで。渋梅ぶ洛心也。

一くらすれ　今 東山城国愛宕郡之内。小野ハ上栗栖郷也。栗栖ノ下社飢也寛仁二年十一月廿五日陣定ありて官符を下されおつかれ。此相論まくらすのれさうちくらんと云ハ此事也文

一くれるあの衣は紅ま染襟を眼の时ハ黄がちま染て一暮の跡恋しの眼をさるや

一くちう　九重　宮中　宮中をらちうらしまむぐし毎說

一くらうらる　眼着ハ倚廬と て夜屋を切さげておりしまするら倚廬の跡ハ日月の光るもあらずさや。礼記問喪篇寢苫枕塊哀親之在土也

一くづれそめてハ　まうぬ女の心だけ初ぬれバ名をもけるらや

立田川まうきつぞん尋也

心也。雲霞の中ましつるめ詠人やいとちる事

一雲霞を　雲係王宅一詠人ふまの

一くちつくぞそ　軸室ども様ぶちそも同心や

一くうしも　ひさちの苦の共のころされうすとのくち

一くそん志も　参ねや　くそんすとわらなも事

一くさくのむくひま　經信する人のすや。面目悪錫嚴為人所喜見法華經隨喜功德品也

一くそくち　摩達　古今集の作者まも。くそといふ名事

一くちまるどの　死屍　槁木　枯うる心也。持うまれくく無心さしてと云心

一くらぬるど　官位ハ發心の妨とさるや

一雲のそうくま　横川ハ雲のくら山あれど此おくらハさもちさまま。

山風吹くらむ　とひのべこそすれ

源氏国栗巻第五

や

一やんごとなき　毎二止すゝ氏儀や、上臈女人をや、忘ハ位
なきくのすいこそされぬ始なれバやむことなきハ仕くり
一楊貴妃　長恨哥さ川　一やくためしにて　やゝハ劣やし
一狭浪時さ　一やまとさう　和国のおや、月本ノ
おんのすや、ゑうごやまくおんよ　節用ぜうごべし
氏心や、右条仲丞、光孝天皇をおしなもらしいやもとおや、下
の河よおんいまさとい云ふ繋人のすや
一山ぢの山ろハ様と云や、ダぢ今の昇下や、狂おハあるけるや

一やをゝ　ちうくやゝくやゝくや
一やゝ　やとの声や　一やゝ　光ありよふべし
一やこゝろん　やゝ止や、又病や、不よふべし
一やうゝゝを　歌うゝゝ同一一やうめいのすけちう人　楊名介
三ケのろすゝ一つや、彩候古今雑中、源氏物語楊名介のすを
恋ちゝ物作ゝ歌ゝ作ゝてゝ返りけり有家雅朝作
つゝくゝ作ゝもまゝふゝぢの宮れあゝれちべゝもれ
久ゝ恋ちれ
ゝゝあてよゝれゝゝぢちゝてゝ
一山ぢも云ぢゝげゝい　古今の序の
昔よゝを秋すゝゝゝゝを　一
句や　一山のゝれ山ぢゝ氏源よ句ゝ

月を我方にてうち見る
一山びこ あそびこ同俗ことむ
どうみこれや 一山へ山どうりへ數山のこや
寺どうくい三井もと知や 一やらう 座敷やどうこや
一やうひ 三月 うきの月もやりてうもや 五月しうき
二月にきりうき四月うきさ 五月さうれもひ那や
一山おうさ 袁山吹のうあい面て 庭
行基裏葉や 一山のるもおどろう 琴のこう
へとうて 鶴雲おうもうぐうひや 五月のうあるこ
一山もこまうわうう くうまへ 庭先のつうや話を私さや
一やうもそうそうず 先いどもそうず
一やーはまり くうう私と地紙と書や山紙と書ていひ山づこ

弁と接やうい迎名や 一やうのめとおうびやりのまれ
うや 妙安妙院どれもおうびやうひ心づくうすをいくう
花去年の九月 妙安のれうぐうひ心をつくーのひ今ハ又安院の
一ゆうようて弁をうちの 一山つこ 集日本記 古産 景万俗ようやびこうや
一三月六日あうの行 三月六日や
三月朔日ありうと已云う 世風記云三月 一巳桃花水下う時飲
食為厨 續漢云礼儀志云三月上巳祓禊 上 上巳祓禊のう詩まよ大成ようあるこ 三月上巳日宮人置宴飲於東流水ノ
三 蘭葉招魂祓除不祥

一山ぶしのひぐらし　山伏といふ世俗のがれて山林に入
　哭　物る智家と云ふとぞ
一やまびと　歌承
一山人のあるさこのこ　文選潘安仁笙賦曰　棗下纂纂朱實
　離ゝく　事文類聚事物紀原曰　漢武帝時　西王母
　見二安期生一食二臣棗一大如レ瓜　今棗あるさこのこいへる
一山ぐらいさうられ　山口祭あるそれも祝人のそぐめ
　んとて十月の山口祭ありそれ
一やまぐさ　染ぬ秋の表を云　万葉集一云　天皇詔二門部王一
　朝臣競憐春山万花之艶秋山千葉之時頽田王歌
　云　秋山の木葉をそめそむるよりの略なり
一やくさ　あさぐさといふそれ
一やまびこ　和琴の名　勿論也　それが変りて　和國のこと
　さうや　ぺさそいふるそれ　和琴は絃六すぢあるを
一やまがつ　大抵猟師をいふ　下賤のいやしき
一やまさくら　同上　下賤のいやしき時
一やまぶき　紙をのめあるそれ
一やまぶし　紙をのめあるそれ
一やまぶみ　和歌の異名　勿論也　それが変りて　和國のこと
一やまべ　猟人　猟師　名義抄　日本紀　神功皇后
一やまぼうし　樹の面白く　裏あをく　夜は印をとぢ
　さうるやうやうそいふるそれ
一やまがつ　大抵猟師をいふ　下賤のいやしき
一やまさくら　同上　下賤のいやしき時

節ものうめこそや・一名下襲の文・時節ものうちうち・梅
八十一首ちなみ風す・雲冬の御こゆ・雪の朝
一柳の葉ともまごびおてけべき　史記曰・楚由基者善射
者ゝ去柳葉二百歩而射之・百発而百中之左右観者数千人
皆曰善射
一紫衣除服祭舞人・行文・摺袍薄蒿深下襲地摺袴合・
袴・陪従・楼欄文・摺袍・柳色下襲・白綾袴・合大口・茶地半臂
緒別等・各用付之・呼名
一柳とそびてつらつらん　河陽県令潘岳
一山あるゝすれる竹のうつも　河陽県令潘岳
一柳とそびてつらつらん　河陽県令潘岳
一陽成院の御前　陽成院の御事・或人文貞保親王と申

うつれと桃園の武陵の桃
一平山里の長とうつら　山行者冬の名
一山ぐれもうれを心元もうク宇治をいうち・さ
やうのへいさぐらや・者の心をいうこと
一やゝともを待　追や・女ひやう
一山ぐちのうち　山もいとすし　筆之誤の吹の上
一やゝまをび　やゝまれべや
一山ざと元　ふもとの庵やし
と・雅景ーのうや
ひゝくのうちのをちこちをあうち
一平山水の　文ゝく深ゝうぐ
ともわうひとも意の中志

一さんそんしんや
ひろへてそてうくてうや
一やぶわるい　夜もすがら　日の
有とおもふまに一夜ねむりぐさ
一やうらもとも　昔やうらこころ
と。寄生ねとへうらうま
一やうれうこ　家賢や
一所やぐるま　前の春の哥をそひれぐさと書る
一やみうらいへ　戒を破うも物ほうさなよ
一やとをうれはうら　浮舟の秋の比
ノ小野ようつうの夫へ　妻のうえ書ま
しおろめいるよ字治へさいく　浮舟の薫の海
まで
一まだしゆき　若葉より初や　四季ごとの心や

一まうけのえ　儲君　業平也
一まうのびくものふ　参進　日本記　系譜　系昇　ともいふ
一まうさおうとう　うぐるうとうの心
一まうでちん　まうづ・まうで・まうしづむ心や
一まどうろ　まどふや
一まどうろ　まどふや
一まうくてまうくてまうくてや
一まううち　実ごうや
中わや　ぶ物ほしうる　しるをつくへうる心そ
一まれよいあるぐちのうそぐへ　夜重又宅　ぐて心をひねるをう

一まほ　まほとよむ。真帆とかくは云詞也。かくて真帆と
いふ詞ともいでたるや　一まんな　真名也
一まさき　さやくの心也　一まうと　真人おがみて云詞也
一まらうと　客人也　一まろ　我れを丸と云事多し
一まくらかみ　枕上也　一またゝきて　燈のかすかにひ
らめく人の月にくまなき秋をまつ
一まつりさん　陰陽師のするまつりや
一まきれなかき衣　八月九月正長夜　白氏文集
一まじなひかち　厭術加持ことよせ力也
一まつのわか折るゝかは　句ひやかなる物也
一まことしさやかの　みすからは深のかのかしのまひしるや。

ころもきといふその目出實なるべし。されどもこれを心也
一まろむ　まろひ人まろふどもや　一まうでくらべにも　御膳おる
てんぐらや　一松の雪のおもり　貞松軟
巌窟といへる所にも潤ざる松の性のあらはるゝゆへや
一まんなかけいし　敷所にて方なれ是周をつくさるゝや
さいろきも又。敬自に入ころて。夜かたらうすごもつるとうや
一まなしゆさきひはあらで　桑上は母なる秋。桑なやしなひて
あれば三月の暇を。康心がして。除暇の後を志げらくはなる
の衣をさめふや。まなしゆさきをさへ紅梅あるき桜梅桜など。名
おつきねと云べし　一まかけし　まかぶしたてぐ所かり
ねざらるゝ入るゝや　一まつかれ禎　条といひそへば蝶蔵

のまろうのうや

一まろ〳〵とそぐ〳〵　遺愛寺鐘欹枕聽　白氏天

一まりてあちこち廻すめぐ〳〵ぶし　多紙望て武蔵いまして添の方よう人ぐの和のひろうちぐな

一まりくるさつくらるて　定家ノ説ニ瞬ヲ云ヘリ　源氏ノ蛍ノ巻ニ瞬ヲ教ヘ

や摩迦那波日本記

の繋ぐ消しすぼれうを云や　一まりくるさ　瞬や

一まりてや　まてさばーや・まま嗤が初や

一まろ〳〵さ　瞬や

西京妓ニ云　瞬奇ノ旨・舞ノ人起座唱万葉ニ　我皇処許億仙

ト　万葉ニ元亨慶長ノ年号　催馬楽ニ漢海三船撰ス　今業万葉ニ

一すぐて八ク（レ）の約やそれを濁音ようこひてぐごとれあひよ万葉

ニ云ふ也　暗奇ノ旨ニ舞人のうちを風よいうするうを。源

氏の蛍のにぢさいよのうや。ぢ

一又もいのて　一通い雲ノ原。一通ハ文字ノ方ノ名

一ぬんるれすろうろぼぐる若ちれすろうろこひぐとうく

して。ぬうる書ろうる紙云。それハ私もこぶるうる紙をやうる書

すぐさぶぐけちるさ文字すぐさうろうべき心や

一まぐうめさうう　寒地ともぬうるさ。寒地ノ先ニ第一第二ちぐ云外ぐあるや。

一まろうねろべう　山径や的村ふるや

一まろうの心うけるふ　非を納受ろ行うろ孔家のこれ心や

一まさかくさ柳葉ともら　神荼有千歳早春一ち福也。

一まきとつうく　源氏これ息子ならんとしぬ人ハ仏神の守護

しなせ人えらるさ法ぞ代弟子て寄給とも

一まうびつるる氏　仁和寺の御室八大日也　摩訶毘盧遮那さ

八大日さや也　一まつしく人さまゝし　行人の

眠さしれおそろしきき御とさうはまつしハ日やづくまく

そろうくしきちどやうの心んこと

一松ヶ崎と山　極楽の木まある名亦也

一松路のあまれ　夜のるもしハ念仏行て力ま海とめうまをいくり。

されバこそ今定めさうかべき名とハいそうそてのかべきや

一まえ紙う河声　吠々残灯背壁影　蕭々暗雨打窓声　白氏文集

一松の葉をすまき　仙人王老食松葉不飢寿百七十余年

すくハのこのれ心也

ふうき心や

まうげしそ　心りしちくそうくすまや

一まうさぶう　木れ枝よ山さらびれを造営してかづちを投まう

らぬそら。杈椏和名未太布利

杈椏まそへふうと行こまうらん。松よそくてら

一まろうそそくうくれ　得仙家ともて　昔のくにや中宮の爪射

あれしバ二取亥氏おぢさや

一まめ人　忠人也　狂言万

一まがく安

一あくくすまきまる　全ゆるん

一まいてとりれと云や

一まうこかうぬ　かうぬハかれぬや。

一まろうるう　園頂　法師也

一まめくしさ　まろう数也

一まうちきんさち　大変也。

一ささぐり　ささぐりのこと

け

一げらうの更衣　（並ギ）（更衣）
さこばよりうちてうりてハ（桐壺）（きりつぼ）の更衣の中れ
一けよくむべさいのうも　更衣の里うてのうさいうら
一けうてハ　ねいひうやいやちるべし
一けうあるけり　（奥）あるべし
一けーこそべこ　ざれこそ
一けこそ（ケヒ）　気色花（ケハヒ）　散物
一けこうハあるめ　げすくへあるめや　何（ケチカキ）　不下渭（ミスケシヌ）不逸
一けらうさ　気近
一げらう　（ケシメ）結目　掲目
一けどめ　何　（ケシメ）
一げらう　（クダン）下宮や

一けうらく　暁（ケサノ）夏や
一けうこう　（ケサウ）急ぬや（メモシヲカクル）
一けうさき　気味（ケウキ）　気（ケウキ）
一けこれめる　気（ケウキ）をうこ
一けこうきあるる凡こ声
こうこ名や
一けんこのおこるひも　験（ゲン）方（タ）や
一けみうこそうう　物（ブツ）ごし
一けどうこうちるこ　（ロウラヒ）れるこくもぐんのあるこ云月
一けこやう　清（セイケツ）方
一けこやう　清方

一けうこう　暮（ユフ）のこあや
一けいめい　おどろさこれこる心や
一けめこうこう　気味こうこ
一けこうこう　気味こうこ
一けこれめる　気（ケウキ）をうこ
一けこうきあるる凡こ声
こうこ名や
一けんこのおこるひも　験（ゲン）方（タ）や
一けみうこそうう　物（ブツ）ごし
一けどうこうちるこ　（ロウラヒ）れるこくもぐんのあるこ云月
一けこやう　清（セイケツ）方
一けこやう　清方

親と延喜源氏姓をつぐや。祖光源氏
一けうく　あつひ　行成のれ孫や　一ゆん　ま　誘生
一けうとうそうすべき　行をうる心や
物忌や長神　方違八日六日続するや。一統行てもつぐ物忌
ぐぐさうこ心べー。天文よれば物忌
一けちえんちほげ　揚弊　あーつる宍気とや　長神
一けうさうー　源氏うういちやうとれ心や
一けうある比のりえうて　騎林の人出来するや。韻の字を
初韻とて。行字をもうて韻とすることもある。此の中よき韻
とうて。此の文字の中。平声のなを取て。韻とするもあり。

又仁韻うてとも作者の心まかせなる時もあるを
一源氏のうちつぐこと有　源氏の姓を給りてぐれこと。夜重の中巻の後。詮子女乃女院中更に
心は在氏の中絶するや。帝主親主の氏女をば源氏とする也。
一けうさうーよ　化粧方をよ
くつろや
潔訣元
ちぐく。おくらる心ぐんとうかたある一けぞん　家擯家のことか
一けうぞん　なぜんや
こいう心や
一けりんけうと　行文後や。有文後や謝恵連詩に。客後遠一
万来遠二我鶴文後と云ふ心や。或説題文後や。くいこそやうぐ
云ぐー。当時は戦の空なうとをもうやや。大略月

そうれいけの春さい眺(ナガメ)まて茶(チャ)とそうれ
春のうた
一けやそうもつそうもつそうれ　芳垣(ホウガキ)の哥(ウタ)へ男(オトコ)のせなかのて家(イエ)
恒(カネ)と訛(ナマ)ていわうと女のわやうづくんの
とうとうとそ弁(ベン)才(サイ)将(ショウ)そうひのやそれとけやくそ片いろやそろ
けうひ家のこゝ句(ク)を年(ネン)へまけうひ家のこゝ句を年へまけうひ
若い物(モノ)乱(ミダ)右勾(ウコウ)をうくて世(セ)よ恒(カネ)てけうこの多(オオ)いそもこゝうこと
かめべーけやけうそなくーうるさきるこゝ心(シン)や
一除(ノケ)氏のうちうこゝ石よ　春(ハル)若(ワカ)やうこゝ
くそ日の汁のれこゝめこゝこゝ
一けうこゝ　猶(エダ)数(カズ)こゝ恋(コイ)や
よ立(タチ)名(ナ)就(ツク)者(モノ)猶(エダ)のうや　一
一けよおーうこゝけうこ

一夕(ユウベ)の茶(チャ)の句(ク)よ世(ヨ)中(ナカ)とむけうこゝ
云(イウ)よ字(ジ)とこゝめて我(ワレ)のこゝやうこゝ
一除中納言　芝中納言のうーけ河(カワ)の
まにもこゝ又椎本(シイモト)も中納言
よ吸(スワ)ねこゝけうし芝(シバ)中納言の時吸べーけ梅竹川椎本同じけう
をこゝこゝやひ男(オトコ)よこてこゝなりめこゝ混乱(コンラン)すべうこゝ芝(シバ)のきぬこゝめ
の春(ハル)のこゝをこゝうこゝよ雨(アメ)も同(オナ)春のみ行(ユク)よ勤(ツトメ)
一けんこゝ結(ムスビ)　碁(ゴ)の勝負(ショウブ)や畔(ケン)見(ミ)作(サク)の心や又現記(ケンキ)やけうこゝ云
うこゝもあるこゝけんこゝうこゝ
一けうこゝ　孝養(コウヨウ)や
一けーやくこゝ　謹(ツツシ)摩(マ)よ茶(チャ)
一けうのこゝ　茶(チャ)

一けうやく　投易　拍子くるひを云ふ

ふ

一ふくそく　皇子七歳にして詠ぜられ給ふ　註解経序

といふ字をあてゝそれも舞や踏手・拍子・節・文字・歌の御ゝ

とゝゝそんぢや七歳の御ゝ

一ふそうし　舞踏手の舞ひ足踏ふみ

一ふそうぐ　乱香舎也

一二のみちふ　貪福の二道也　富都女易嫁ゝ畢竟其ま

貪家女非嫁ゝ晩年新姑文集

一ふびやう　風病也　又眩病也

一ふつふる　不意也

一ふくろ人　ふくろ

一ふくろあねのふくろき　糸巻

一ふびんもる　びんもるとも云ふ　ふくろあねのふくろき

一ふくろう　梟　説文云食父母不孝鳥也

一ふくふくろくろして　子の父からろ

一ふせで　卧薬也

一二間のさい　ふるまい招化堂也

一ふげんぼさつのみそち　普賢菩薩乗大白象鼻如紅蓮華色観普賢経

一ふそでそぐめ　てんこいふ歌の投てつらつらぬ也　昔も

まれる志すおとこのく。紹永衣ゝ
招遠云。ゝうそのそぐめを。言ふ
中ゝおみけそ〳〵けう哥。まり
一ふでのそうそうそを　詩
一ふそうぐかうず　詩を披論すゝ河ゝ論中ゝ立ゝう文章とう
そて。此帯ゝそ〳〵文へぐもハ勝下ゝすゝそて海嶼すゝや
一夜のそんしめふ花　詩やけぐゝるずゝへて。大ゞけ亭ゝ
て。若ゝ寓ゝう。又天暦三ゝ年四月十二日。書舎夜ノ話ノ寓ゝ和哥
管絃あり
一ふそうそ花ゝ詩ゝ花ゝ紀ゝ序　長恨
哥。庾ゝ多ゝ詞藻　会寒ゝさゝあり。呼。白氏文集ゝ廿二庾ゝ引

勘処旧牧故令衣。誰ゝ去ゝ云ゝ時
一ふそうやうそうそう　不定や　一文主のよ武王のおそ〳〵
史記。魯世家。周公自稱何ゝ
とけうハぬえへ周公の王位のつあそのぬくるぐ武王ゝ成王の位
ゝ付のへうぐそ〳〵ゝ地紙をうずゝへていそ〳〵。半蔀院の脱履あゝぶ
今ゝ此位ゝ付のへぐきるや。そ〳〵半蔀院の次ゝ此ゝ付の冷泉院を
此位ゝ付のへぐおゝ遠するやうるそ〳〵ゝそて成王の御ぐそうの給えんす
んそ民令ゝのぬそ〳〵ゝそうかきさ
成王のう〳〵叔文や。行天下ゝ示ゝ玉賊
一文集　白氏文集ゝ廿二庾ゝ引
一ふんのうそ　物名書司ゝ

祢宜唯作云御手奈良う万為礼書司則取女名置之礼流
今東物合の流に心礼遊あり書司ハ女官の名和琴をつさ
ゐるふり和琴やもやて文のつさゐやらめハ宮多の流に
つひう和琴や
つさゐつら文のつさゐを琴をりのみべきに誰もさくらく人あ
一ふけんう 普賢海礼
一仏天礼つげ
一うつつれと 大うやうさ
一ふえのもうもうといい 向ふ朝思舊賦序曰隔人有談笛者發
声寥亮追想疇昔遊讌之歓
一ふかへも 大時 筑紫図のこれをさ名寄や

一ふくろくろう 肉このすぐいふうちや地のうやめめぐうさや
一ふぐちのうそうが 女の装束もうううあや
一ふれぐひ 舳や艫ううりぐうすれや
一ふくりくさ むさみる心や
一ふるうううひまて 玉ハ玉家
の孫や源のようても養のこのうみや礼とのうち
一なのうう 四方の紙ハおやうううるよ夕雪
一ふんせさても家礼ういう
の家礼のうこもうううあや
やまうも他人うれでみうううあや
も家礼と云やうよれすへ儒教のうへやや
一ふせるぐおほや計 親王大臣笠布施を四裏ううう
法や灌仏の布施ハ昔ハ絹を用うを中比ら紙を用うやへ

一哥ふく衆ふく名ふく名ふく　わくは浅黄の袍ふくべくふく
一着衣ふくもふくやつれ給　眠衣ふくもふくさふくやや
一ふくられそのふ　奥入ふく哥ふく不用ふく哥ノ神仏俗ふく兵箱
分の物あふと心ぬてふくべーとふく
一ふくいふくものふくぢふ　譜や　河海ニ琴ヲ譜のふ　行ふくふく略ふく
一ふんーごふくて　物気を封ーふく　箏ふく行者の物や
一相ふくふくぢふ　女三尼ふく吹ふくても　泪ぐふくふく袖や
一ふくふくいふんふい源氏のふぢふ　女三のふすが矣止ふや
一ふくめふく心　乱ふく心ふく
一哥ふくふく歌のあふれ　琵琶ヲ引ねふふふ更ヲ泪をばりふくふや
一哥ふそ竹ふふふ　相ふ着中れふく風ふく息ふくすふ

わふれぬやふふぢふ
ふくふやふぐふ　浮線綾　唐綾や
一ふすく　数ヲ数ヲ数ヲ数ヲ　餅ふく
てゆぐーかぐ菖ヲふけてふく　音律ハ皆声の調よりて吹
中へふくふくふくて　行のつぼふて　哀
ぐーまるふやうふかの物ふふく
一文ふそふふのふ　先祝乳母ふて　型形よ物ヲふふふ
哥　ふふふぐれ　ま矣ふい旬と芯ふの中をいうぐとふよ吹ぐ
一舟のつぐふても　武勇不道とふなふ

一二三日

一ふふふ川の　ほ海の心ハふふぐぐ

一ふくろぐち たうとこと同九
一ふさいのろ 吏事や
一ふろう 不幸
こ
一こゞあろ哥も いろ〳〵くたさちろろあり時も
一こゝろろる 世方や 一浪淑義 此義の而ろあろ
れ、学れ来よろろも 一ろろろ人 心業
一ろろろ 心操 一ろろろ〳〵いろやうろ
きれつろ〳〵こゝ心も 一おた納ろ 却ておたた故仰
べゞあろし 時ろもひ一人のもや
一こと等 言程 一こまうと 高篠人のもや
一ろうろこえ 花城負令のろ 其玄蕃とゞ訓ろ法叩ちうとの

つろさゞろろ云ハ修蕃ハ容や 修尺さもゞひ一百歩國
ろる来朔をしめる蕃客とあるゞく〳〵寮よりろさろも
又鳴肝ハ腹の前を旦肝鳴のろくさろ
鳴肝ハ声を作ろさ云や 異国人事朝の時ハ通ろとゝ
さろて あまの心ざしをつくろゆや 七条来庭ろろ一も或
爺孔四つゞ云ふれをくろも 一こうろく 会舘 ゆろろ包や
一ろ〳〵ろん 敷奏院おさろ 愛のもや
一心あて そろろや 一ろろ まろちちゞいいろ
ろゞとや ひゞろちも猫云や 一こゞそり 云撰や
一こゞ中ま 注ろろれ中や又終神ろゞいふや 云こ
ろ雑あろ中ま 一こめそて 巨宇やちやう乃

一ここそこ〳〵ひ　ととと〳〵わざ　一心づくし　心こころめや
一ごとごとち　坂遊（ダテ）　御（コタテ）自慢　あの恥名や
一こと人のいとんやうと　いろ〳〵みてくるめん人のいとんやうう
と・やねのの浮氏のあをうひめよ〳〵ぐるり
一心そこひ　心づくしやおそて古法（コハウ）やし
一こゝろ　それやとうよ心也　一ここともなく　かめそう須也
一ことのねも　紙（二八）つれちさん人とばえやハ引ぐめめくる・ろ折みて
もゝそれをの紅葉（モミヂ）ともみてこゝやしなれとうよ心なれ
ハわるまるの美也　一ろ〳〵なれやし　伯（ヒ）のすや伯よ
もゝのごとうなれを　一ごわちのごやくうわち

一心夜の暑気（サウキ）　笑ハひろとや物や　暑気（サウキ）ざろ物や
一九日のそん　重陽（テウヤウノエン）宴（ニンセキ）よハ天皇（ナンニヨ）南殿より出（イデ）ろて　内弁（ナイベン）外弁（ゲベン）等
ある文人（モンジン）博士（ハクセ）をめして（タイ）ゑ
ろ詩を作て（カウ）傳ずるまあ
一お傳（ニカウ）るのこ　中納ろそて名を書つをけろ人や
一こゝろあくるれバ　ろぐ〳〵おく〳〵明りや
一ごろ〳〵せまよ　博物志（ハクブツノシ）ろ　変造（ギヨウクル）圍碁（サウノゴ）
一こゝろあやのひく　衣房の袍衣（サウノ）の裏表の月の日ろハすゝ〳〵ろ
ひわろそわそ・ひくくろ・ろとくろ・ろあやうちろろぐ〳〵
ろ　こゝろむ〳〵さ孔子深（フメ）ろ
一これまれも　ろのもわ

一こゝろ たゞ独りごとする心や。うらうらしめやかなる扇や。

一その心あれ 九品上品上生のうちや

一心あてに 花 夕がほハ女のたとへにて、あるが家に光ハ源氏
まうで給ふべし 一これよりが おぼつかな 夕がほの宿

一こ 惟光がめしよせたる人をおぼつかなくや

一こゝろ 小舎人童 中将せう将ともいふなりや

一ごかくしうたの言や 一ごと 如や おなじごとくおなじ

ごとくや 一心ぞうつろ それハうつくしき事なり

一こゝろもち 見るや、かの心のうちせんかたなく心や

一ころもし 河 おもき心や 琴かや、かくしたるや

一ころへ うつしもとへ心や 慰心や

一こゝろそぬ念仏 葬送無言念仏得十五功徳云々 河にお

一このなかなかしと 鴿や かへりみずはなちやりしの院

までも鴿のちぎりあるべし 一このほどまではくだりよろづなる所。

中院寮九日までハ中なりくだりてきまかぞとや

一この家のあるじぞ 楊名介妻ハまゝしき宮めのとが娘や 三人の内

嫡女大弐一人ハつまハ源氏一人ハかの太臣の別の夕がほのめのと

が娘や 一小宰なれど 柴垣のやさしく

さゆるさ雨や 一近衛の中将とす 此明石

入道、前大臣家の時、近衛中将までなりけれどそれを捨て播磨

の守護となり給へりや 一ごこん 權者 加持祈禱や

一こゝろぞうのちかい 憍慢禁足の塔、三年山ごもりとや

一こんがうしのすゞ　金剛子念珠なりこの事ハ元興寺資財
帳并九ところに
馬と貴布祢の中に僧正が谷と云所に薬師仏不動尊霊験の
地也薬師仏の壺を僧都の送物になさるゝ也

一こんるりつぼ　紺瑠璃壺也

一ことば能ある人にて　物よくいふ人也

一心よくわすれずおもはれぬ事のうへにとめてハとや

一ろくもうしところ　葵上六条御息所の事也

一ことはの来つむ人のいろんやうに　今なハ源氏のめのとこれハあやうきところ
かりよあそとの事也

一心だにすゝき　心だにさし

すゝきろろさや

一みちのゝ　流前　天子なりとらふてごまんと
まゐるべし　おまへとくさへすゝむごきんとよむべし

一こゝう　巨口也　ちはやうごろきれある心也

一心ゆふぬおくさきぬるを云　心ゆくハおくゆかしき心也

一こしのうちも　中宮の行啓には鳳輦にめさるゝなり　文庇
のいとげの車にめす時もある也　供奉人の行粧も　装束り
よそほひ也

一後ごんのすけ　弓の絃をたえておなじ後宮といふ名目を
男踏歌の後二三月に弓の結あるをいへるそれを後宮に召
あつまるや

一こゝろなきなまほしきも　これ
むらさきの雲をうちそて月をいだしきるなりや

一しれまへにそなへげのかくさせ給ふ　二条の后の忠仁公に
あづけまいらせて　おかげにてそくさせ給ふ　源氏の物かたり　伊勢物語

さく夢よりさめてのち
あはい
一ことつけて　ささげそや　一ぜん供の日れう〳〵人の思心今菜栄
我の妙院ト定めて後、栄ゆるのぞみてれそされするあるて
すく初妙院へ入の小初妙院ニハ、本門の中、大略識或ハ近前ある
を監ごて、それそれ三ケ繁妙のする、其ゑ九四月なれ社へ来給
れうて、祭のおる吉日を撰て、文れ後のする則ち我門人ハ三ヤ
入のふ、これを二ケの秘といふ、そは
ま酒落、毎年の供供心平日それを修する也　下略〳〵

一ささあをよびのうえ　花田よあるのまわるなや
一こしさうつくり知そんやうろうを　三枚来晩之候ハ夜将
明之天別緒依之精魚声切〳〵之恨遺途断時〳〵

一ふんそうそんやうや　壇御修法　野三世　陣茶利　大威徳
一ふんそんの日法華経や　一こまもろ　拍取九細多細多
ちどいろさびや対座よめさうて蚕や
一ことるさて　花　塾居をろ人のほ人出あるとふ供うを乃
一こうのべて　花　塾居をろ人のほ人出あるとふ供うを乃
そこいや
一うちず飯　うめるをこや
ちひも月心や
一心〳〵ささ也　花　ささこハ仙境也
て当世こいつう、居小園の世ろ
ちゃうそろ
琴はひそろべめれば

の哥の心や

一胡の子のくせくしくうるん女

名玉照君ハ胡國の王う嫁をつ

らくおもふまゝをらくす。こゝまよい我心人などやうの遠國へやる

そくばいうぐひすのなくもれるさとのうめんとうぐひすのあるまよまもるさ

るうれと。家ふこのふるさぐのあるようけて。昔よるをいふる

らへのうや

一このまゝうひろ物んやうし

道満法師 居住懐磨國云ひすれ

一そうじ 田舎や そびれうし心や

一こまれくるこのうこ 高野紙や

一こゝ面もじ 木ゝも樹神心。それぐこゝをあゝうじと書

一こゝうう 何をくいひるすや

一この世のちぐらハ竹の中よりおひそれハいや

しくんや

一うせのあうこ 野私塾 除肖成文

時平公

一ゝれ哥そくまけさぐめん

新讃岐廿目後八位下巨勢朝臣相見 畫師 昌泰三年除肖執業

一この哥そくもや。天徳哥合や模さると古来抄云勝負哥

例や。宇内親王後拾遺二ハ内親王給合しゐるや。

一こゝうの待従が母やせうるさ地のあれ紙ぐこと名紙や

一心ぐ 天暦三年菊花宴ハ紫宸殿ハ

お数の四角まいく。金まて松の枝そ。ふうて紫ともすべ。鶴

もぐ仮てうるる。花心葉の中や。今ゝ後の哥のも。金ま

て哥を仮てそくうるをこゝべし 拾遺のうるも心ぐと云を

一この世のちぐらハ竹の中よりおひそれハいや

しくんや

一うせのあうこ 野私塾 除肖成文

時平公

一ゝれ哥そくまけさぐめん

新讃岐廿目後八位下巨勢朝臣相見 畫師 昌泰三年除肖執業

例や。宇内親王後拾遺二ハ内親王給合しゐるや。

ゑの弟子まうきて侍けり哥あまた略之

一この時まさとする人の人いひつたふべき　世にもしらるゝ延喜天暦の聖代をいふなるべし冷泉院とは天暦の御字になりてすへ給ふなるやし

一松風　これ岩の内のおほ殿のつくり世給れ堂　花鳥余情ちるにれし　てるかは棲霞観は融公山荘　後によるまゝ成りて清涼寺の東にある阿弥陀堂也　法橋上人奝然に清涼寺の釈迦堂建立と云ふ

一こなたにしづかなるわ　小鳥付枝のうち　数九を羽の下にかざして出　菅萩は御ぞにかうて付也　荻にまかせず萩薄菊れ枝をも付やなるしにかはるを物かれんとるまでもと云類成べし

一近衛づかさの名ある物のふ　今来物節と云は近衛の舎人の中に東遊に達せる物節を補ぞす中に番長府生

掌なども歩ずなりし光よらて春日祭賀茂祭の使の羽林東遊のを求十人めしぐする物節の近衛　求子駿河舞などと云す
とつともいふや陪従とは府生の中に才ある物を用る　和陪従もいふ
近衛の官人や陪従は和琴笛などを吹物を云也略之

一これやまうしあへやかまうしあへや

一故大納言いまのひとなどぞ　大鏡云三条院の御時に后にたまんとおぼしけるは大納言の女の后に立給へるなれば成文
大納言を贈太政大臣になしてこそは后にこそ立給しこと

一おほえるといふすゞ　史記　明君知臣明父知子

一於いてまつる　源のまいとるて於いて惟光がむすめ年ごろ也　同云源氏君は公卿のかうやに一筋可仕むすめなど

おろそかなく作ろう。忘れ分。風習（リウシン）。受（ウケ）。飢（ウエ）。
表のみ数（カズ）とるべく
やう細（サイ）のうや　一
何ぞさん面（メン）そう〳〵若〳〵
き方（カタ）ようわろやべくこい上（ウヘ）に着（キ）。おこあいさめ（ママ）ぬ心（ココロ）ありやべ
一心〳〵当（アテ）ろそれ心（ココロ）を当（アテ）ある紅葉（モミヂ）のたもと
ひろ〳〵　一ここべくそべくろ　扨（サテ）いひの
ものまうさんやべよ
一ここの月（ツキ）いされてもち　三月
当（アタ）の終（ヲハリ）や。四季（シキ）の終（ヲハリ）月（ツキ）。世俗（セゾクニシヨウゲン）行（ギヤウ）なせいはや
一胡地（コチ）のせい〳〵さびしむ〳〵くすべくつ　一本
見（ミル）白氏文集（ハクシモンジユ）　胡地（コチ）妻（サイ）を虜（トラ）へ漢（カン）攻胡（コウ）之時（トキ）漢人（カンジン）止胡（トドマル）
帰漢軍敗（ヤブル）之故也漢又従漢攻胡之時止胡（トドマル）之人（ヒト）欲帰漢（カヘラント）やべ
胡妻（サイ）を而漢（カン）不（ズ）従（シタガ）人（ヒト）剰（アマツサヘ）圍（カコム）之号（ナヅケ）敵（テキ）而（シテ）伺人心（ヒトノココロヲ）仍（ヨツテ）両国（リヤウコク）為（タメ）之意（コヽロ）ト
物語（モノガタリ）喩（タトヘ）云ふ
一ごとくて　文（ブン）。話（ハナシ）ごと。法（ホフ）師（シ）のつ
わ〳〵物（モノ）を云（イヒ）や　一
一ここまくる　若衆（ワカシユ）万葉（マンエフ）考（カンガヘ）て二夜
大方（オホカタ）人（ヒト）の筆（フデ）ごとくべく心（ココロ）とに
一これ〳〵ぐらいつべく人（ヒト）を心（ココロ）とに　一
いるる筋（スヂ）とい。ごろ〳〵のいる。弱（ヨワ）るるものんを。実（ジツ）に心（ココロ）ざ〳〵てあ
るんのやすいや
一こうそいのいとくいとくんぐらい
紅梅（コウバイ）のしんうさ多（オホ）くいうそべくざ。いまやうべくいとくねのるあるち
一ここ〳〵ぶるをん　寿（コトブキ）行（ギヤウ）　某記（ソレガシキ）祝（シウガ）云（イヒ）や
一ここ〳〵ぶりくりをふろそて

一 こゝの山下そうれ、そうれ
　 誓誌の笠着物(カタビラ)の袋(フクロ)に調木(ヅボ)等や
　 花今盛(サカリ)なのくうれ(クン)どゝ云ふ言葉(コトバ)
　 ほどの聖人(ヒジリ)もあれどもはゞて
　 こそよそう
一 こゝもまんさいらくもや
　 此の名に出(デ)もの
一 こゝにおつめ　好(コノ)こおつめや
一 これ(コレ)おれつぎをんざいのえん　有(アラ)に
　 ひとまるくらの本まゐ。花鳥三境(サンキョウ)あけ
　 ぬず。うつゝさすれ
一 こゝもまゝくば　引導(インドウ)勤
　 のもさ
一 こうちさひさおろし　うけ(ウケ)ろを引おろし(ヒキオロシ)
　 ゑや
一 これ(コレ)おれつぎをんざいのえん　有(アラ)に
　 る場ろかし。中指(ナカユビ)のうぐさねうとも

一 そうゆひ　もをそゝて膝(ヒザ)をりゆうるや
一 こらうれそけ　古光(コウ)のすけや典侍(ナイシ)二人もこゝへ人も同道のこと至(イタ)
　 悔(クヤ)うえ
一 そうでいうそれのうれそけそうろ　紅梅の唐織(カラオリ)物のほそもるや。女房
　 さうそくいもうこゝへもれさゝゝく　一こと装束(ショウゾク)
　 とい法(ノリ)け拉(ヒシ)つけるでや　一心寺(ジ)あつて風のうく　風ざよ心あ
　 添て愛(アイ)おて咲らすべさゝゝくや。是も落梅(ラクバイ)の曲(キョク)の心や
一 こゝもれさゝぐゝもやくよるうそう　紙そぐうつゝくるぐや
　 くるるや　一枝(エダ)示寺(ジ)　深窓(シンソウ)在(ア)さく　昭宣公(ショウセンコウ)
一 近衛(コノエ)つゝれ使(ゴニンリョウ)　賀茂(カモ)祭(マツリ)春日(カスガ)祭の使(ツカイ)近衛司(ツカサ)と同(オナ)じい東遊(アズマアソビ)
　 とをそうそうねや　一こゝれ秋の衍華(エンカ)等(ラ)化(ケ)生(ショウ)去秋(コシアキ)さるよ。

衣ハ春ニ著シ冬ハ秋ニ著ス是ハ旅のうへの十月也
一小松かしまれるかひ　すへらきよりのなひかれて深も年よりなれぬ也
一こもれ　菰枕　薦枕　両義也　よって枕ハ四千枚也
一こまれらんしやう　三段ハ高麗楽也　乱声落蹲舞これをまう
也　左の舞ハ唐　右の舞ハ高麗楽也
一ゆかひる人のこと　女三の形をとてある世ハ行されねかくとある也
一これをまひつまるを　花　元慶天皇　文武天皇を
弾琴の絃をいふ　呼ことのかれをしけるもおなすといふ
一これなうん　これまハ女のなくへむすをいふ　河一まハ撥手二ま
ハ序三まハ水宇　琵琶四まハ蒼海波　女まは雁鳴詞是也
一女六れをる紙　今の世ニ無業内をいふには　万秋楽　女六法をまる

被ニ久く放ニ女六の破寄ると云也　女六の破六指の破と云也云々
一こうし　卅七ゑそぬるか絃　案ニこれやうれ　年来若宮ニ深更ニ七さ
とられいまうそうも此巻そへ八十年をとりてくる
一心ゆるひある　性弱しまうをうつしき心也
一心ゆるくあるくしるる人へハ　孝經云小取季廿得福大取季大得福
孝經至德要道篇
一女ゑひすゝ　殺生偸盗邪婬妄
語飲酒
一女十ちのれ　誦經　女十の波羅
あれハ女性罪かえニハ罪ある也
一これをるの索ニ　まれ下ニ女性
をへるとよのための云るへき服衣をまれ為ニ云るをさるニ
のあへち霞の衣とハ服衣也
一ことるをかるし此枝　ふるうハ
若あるしの枝とハあるし枝ニありれ也　紫ちれ秋とハ梢

奇特さしていへり　一これはされもこまり侍らん。落葉
衣の琴なと。栢床のまづひいのさんされいや
一琴なとあそふ後　栢床なれはて落葉衣琴も引給ひ
ぬされいや昔伯牙鐘子期とて二人なるのて琴を引し人あるに
鐘子期死て後は伯牙いかやう今も浅獣琴を知者なしとされ
そひしきてやありしとや。されと伯牙絃を絶しはいへり
一声まつるから　荼隠のあまた。夕霧と栢床の和着と云
一これいとしるるをかべなやとて　落葉は慈史恋をみ給ふべしとするとも夕
霧れそのし給とや　一これはなん何とされかりねことを
代々栢末までもち侍りたる名の筆とや
一こよひわしるなる月の色　三五夜中新月色二千里外故人心

一これしゆやり業障　一ことらいへハ　ともし松かる弁や
一ことわらしあて　雲ねと夕霧と栢床中らの和ての浅のるや
一ひ君ろそ　あふ日と云るや　一これされ白衣を拾ひ　天人の心乱しめか
りし香や　二十十二ねハ次二の毛宅よりお隠や大師宗能御香諸家
生るゝ時一室芙しとや聖徳太子も同
一心のあしらや　これひるし乱心や　一このまんへ　おまへこそ合乱
一こくらく　極楽の寿舞の菩薩のあまた
一これも月にあるる　琵琶に撥かさしる事を隠月と云。面白詞や
木のかの嬌琵琶詩云半月に絃上ニ　一こひまひてとありくまり　紙恋
まひてあるんとらには君の山に冫仁をけようハ死るんとおふったぐいある
と紙心とあまての詞也。雪の山にハ葉のまなに。あかる菜れゆしとき

さうふうも

一心ふらうき　きまよハ求法意の事

一これ茶一枝ゆすゑ　牙的園中花

一これこそ　好穀これうるぞ

一こうひつ　小唐櫃

一こゝあてる　褌の事　此段あるハてんねんたゞ茶

一これはうる心得合せ　毛延寿　王昭君

一盃絵着　服　君貧ようそ

ちしゅうやはなもの

一こうたに　離郷ある人し一統本

一ごそのぶんうやて　墓もうう

けもの　狐の獣　仙々の変るゆへん

一こゝねづみあるよ　合此也

一心ふらうき　きまよハ求法意の事

一この雲ハ　くさハ絵をそくる

一これこそ　好穀これうるぞ

一こうひつ　小唐櫃

一こゝあてる　褌の事此段あるハてんねんたゞ茶

一これはうる心得合せ　毛延寿　王昭君

一盃絵着　服　君貧ようそ

ちしゅうやはなもの

一こうたに　離郷ある人し一統本

一ごそのぶんうやて　墓もうう

けもの　狐の獣　仙々の変るゆへん

一こゝねづみあるよ　合此也

一このもんてんハちへ　寄きのこと

一こゝろのとく　はじめの法をさやうあるとや

一こゝちんごん　攅記　行成々長徳六年十月九日於山階寺拝見牛

弘論檀ホ

七仮て　緑毛亀

一心ふらうき　むちうはうすゑ

一心ふらうき　何ごとこゝろ

一心こそうき世の　あれこれ

一はしもろべ　我眷属ようもの

一ことくこハ　悪よハや

江

一江さえわたる　えんぐさも心也
一ろんぎれば　怨（エン）もうもう心也
一江さひくまでぐれ　元禄（ゲンロク）のつれさゆちゆく後（ご）までねん
ばよいもうもうさの心也
一ろ　曲（デ）てござる
ろさ　女房ぶりをいく
一江ひの　けぶりをいくつ　久（ひさ）燒（ヤキ）地の事也　ねん一流とそ
一ろいろめ　蒲菊（ヒビ）はだ紫（ムラサキ）口也　ぶの
一ろひのろ　白楽天（カクシヨウ）が江州（サシウ）へ左遷（センセン）して三月毎日よ
ろさろさ也
なあら詠曲（エイキヨク）のうめべし　芋（イモ）海波（カイハ）の所（トコロ）也　詠（エイ）のう妻
一ろいまろさのべる　纓冠（エイクワン）のう　着服（チヤクフク）の人　寒冷（カンレイ）の
一ろひのろ　白楽天（カクシヨウ）が江州（サシウ）へ左遷（センセン）して三月毎日よ
江（エ）衣被（ヒノカ）香

一ろいろ　えんぐさも心也
一江んぼれば　怨（エン）もうもう心也
一江さひくまでぐれ　元禄（ゲンロク）のつれさゆちゆく後（ご）までねん
ばよいもうもうさの心也
一ろ　曲（デ）てござる
ろさ　女房ぶりをいく
一江ひの　けぶりをいくつ　久（ひさ）燒（ヤキ）地の事也　ねん一流とそ
一江ひそめ　蒲菊（ヒビ）はだ紫（ムラサキ）口也　ぶの
一ろいまろさのべる　纓冠（エイクワン）のう　着服（チヤクフク）の人　寒冷（カンレイ）の
一ろひのろ　白楽天（カクシヨウ）が江州（サシウ）へ左遷（センセン）して三月毎日よ
江（エ）衣被（ヒノカ）香

一江ひの　けぶりをいくつ　久（ひさ）燒（ヤキ）地の事也　ねん一流とそ
一江ひそめ　蒲菊（ヒビ）はだ紫（ムラサキ）口也　ぶの
一ろいまろさのべる　纓冠（エイクワン）のう　着服（チヤクフク）の人　寒冷（カンレイ）の
一ろひのろ　白楽天（カクシヨウ）が江州（サシウ）へ左遷（センセン）して三月毎日よ
江（エ）衣被（ヒノカ）香

なあら詠曲（エイキヨク）のうめべし　芋（イモ）海波（カイハ）の所（トコロ）也　詠（エイ）のう妻
一ろいまろさのべる　纓冠（エイクワン）のう　着服（チヤクフク）の人　寒冷（カンレイ）の
一ろひのろ　白楽天（カクシヨウ）が江州（サシウ）へ左遷（センセン）して三月毎日よ
江（エ）衣被（ヒノカ）香

ろさろさ也
なあら詠曲（エイキヨク）のうめべし　芋（イモ）海波（カイハ）の所（トコロ）也　詠（エイ）のう妻
一ろいまろさのべる　纓冠（エイクワン）のう　着服（チヤクフク）の人　寒冷（カンレイ）の
一ろひのろ　白楽天（カクシヨウ）が江州（サシウ）へ左遷（センセン）して三月毎日よ
江（エ）衣被（ヒノカ）香

爽陵（ソウリヨウ）と云所（ところ）より泊（トマ）て元徹（ゲンテツ）之（の）別（わかれ）の時（とき）作（つく）る詩（シ）の句（ク）也　酔（スイ）悲灑涙（ヒサイルイ）
春血（ハルチ）裏（ウチ）吟（ギン）苦（クル）支（サ）頭（カイ）暁（ケウ）燭（ショク）之（ノ）影（エイ）
一延喜（エンギ）のれうぎ　ござあやもくまぶち　ぶち
そ　ちぢんれをうれてよう
のれ門（カド）うつてこれ　嫁（カ）のあるがくらうろ石（イシ）と
の事（コト）也（ジヤ）ろさ　ぜんうさ也　延喜（エンギ）門（モン）也
一江びうて　蒲萄（エビカヅラ）髪（カミ）也　いさ
れいさひさいろうろれうとい　後成（ゴセイ）女房（ニヨウボウ）ろうろいえん
おろうへうろ
一ろう　廻向（エカウ）
一条殿（ジヨウデン）のうけ　近衛（コノエ）司中将（ツカサノチユウジヤウ）
みさも

一ろいまろさのべる　纓冠（エイクワン）のう　着服（チヤクフク）の人　寒冷（カンレイ）の
一ろひのろ　白楽天（カクシヨウ）が江州（サシウ）へ左遷（センセン）して三月毎日よ
江（エ）衣被（ヒノカ）香

ろさろさ也
なあら詠曲（エイキヨク）のうめべし　芋（イモ）海波（カイハ）の所（トコロ）也　詠（エイ）のう妻
一ろいまろさのべる　纓冠（エイクワン）のう　着服（チヤクフク）の人　寒冷（カンレイ）の
一ろひのろ　白楽天（カクシヨウ）が江州（サシウ）へ左遷（センセン）して三月毎日よ
江（エ）衣被（ヒノカ）香

爽陵（ソウリヨウ）と云所（ところ）より泊（トマ）て元徹（ゲンテツ）之（の）別（わかれ）の時（とき）作（つく）る詩（シ）の句（ク）也　酔（スイ）悲灑涙（ヒサイルイ）
春血（ハルチ）裏（ウチ）吟（ギン）苦（クル）支（サ）頭（カイ）暁（ケウ）燭（ショク）之（ノ）影（エイ）
一延喜（エンギ）のれうぎ　ござあやもくまぶち　ぶち
そ　ちぢんれをうれてよう
のれ門（カド）うつてこれ　嫁（カ）のあるがくらうろ石（イシ）と
の事（コト）也（ジヤ）ろさ　ぜんうさ也　延喜（エンギ）門（モン）也
一江びうて　蒲萄（エビカヅラ）髪（カミ）也　いさ
れいさひさいろうろれうとい　後成（ゴセイ）女房（ニヨウボウ）ろうろいえん
おろうへうろ
一ろう　廻向（エカウ）
一条殿（ジヨウデン）のうけ　近衛（コノエ）司中将（ツカサノチユウジヤウ）
みさも
一ろ　お非業（ヒゴウ）衆（シユ）をま
一ろ　孔（レイ）儀（ギ）也

一江ようそ 縁也 一江なるべし 縁也 はむ詞也
一ゑんらう 炎ごちや
て
一てらう面のきんど 輦れう仰せうや 河て 輦車 くるま
階のるき門うのうら 中宮の輦車
さとし云 牛車 八牛ばうる事までの也 今案 温明殿 後涼
安嘉門 温明殿 八門 結ひおうします事也
東の宣陽門の中にあり 後涼殿 八西の 温明門の門うあり
以寒の詞よ そうらうてんよもとくらうさうひろふ 安史のざうし
七ようつをもて ととのひよ 後乾武うまし
人 女親王 八 後涼殿の後をさうろうさいくう 物次の心よありひろく

門 云也 云う 親範 元云 牛車よりいらいくてどれおうろさ事也
もろれ物 ととのへて 六府の官人のやくうそうする也 云う
一てうと 調度 一ちうの院 寛平法皇のやう
也 延喜の父 門 多の帝 ともし 絵 也 給うてる
母 れう 吸べし 取 れうと 下
洞 ろうの 一番 事 院の 也 ろうそうろう也 伊勢集よ
のせうる
一てうつて ようつそ 一てうし 洞 の義也
しておれようく 仏 のくるを云也 いろ〳〵 いろや
一物語 四月朝日の小物拝 ものうはあるぞ 時

清淨衆の前の座より法座に登り拜也

一天地ことごとくとの人 てんち

一天よりむまるゝ人の 生天を墮三途 天より者おゝく して三途におつるゝ事 一時

は天より生るゝ事 稀 天人のなき人をいふ

一天ぐんぜ 天眼也

一天のまもるかこ

一蜂鳥ゝゝ八人 蜂鳥

きやうきやうこゝろもち

一雜毛人 童の 別 雜毛人

一てふいまして 童の 雜毛 双六

一てうめ心もち 雜毛 双六 心也

一雜毛人 れいの心無 雜毛人 禁中

うぐゝず 僧の 雜毛人 雜毛

まいて 最 すゝるものゝ 最 雜毛

へゝ 僧 雜毛 最 雜毛

く 雜毛の 役 雜毛

一てうゝく 調 雜毛

わざ 云 雜毛

一天人のあまくだれる くやしや

中ひとつを八月十六夜 雜毛

一てんく 天狗 云 星の名 雜毛 天魔の類 雜毛